THREE MEN IN A BOAT

JEROME K. JEROME

三人男

浦瀬白雨

338-25

THREE MEN IN A BOAT

BY

JEROME K. JEROME

のらくら三人男

文學士 ジェローム・ケー・ジェローム原著

文學士 浦瀬白雨譯述

東京 内外出版協會

明治
44. 5. 22
内交

序言

此書の飜譯を思ひ立つたのは四十年の冬であつたが、愈々出版する積りになつて飜譯に掛つたは昨年の十月であつた。爾來毎日少しづゝ稿を繼いで、漸く今年の一月に至つて完結した。譯文は成る可く原文を離れぬやうに、同時に又直譯調に陷らぬやうにと大分苦心した。併し一渡譯し了つた處を後から讀んで見ると大分生硬な點がある、そんな處は原文の意味を失はぬ限り思切つて斧正を加へた。其結果處々譯文が餘り輕くなり過ぎたやうな處がらうと思ふ。併し同時に又原文の意は決して間違へてはならぬと思つて、解の處などは飽迄吟味し、到底解らぬ處は直接英國人にも質して見た。だら自分では先づ誤譯はして居ない積りであるが、併し自ら知らずして誤譯て居る處が間々あるだらうと思ふ。そんな處はどしどし攻撃して戴き度い。

其他原文の解釋に就いては八高の中川君、岡部君、我が校の同僚諸君、就中宮地君等に負ふ所決して少なくない。僕は此譯書の上梓さるゝに當り以上の諸君、且つ此書の飜譯出版を承諾されし原作者ゼローム・ケ・ゼローム先生へ謝意を表する。

東都の臼川君、六高の佐々木君には出版に就いて非常の盡力を戴いた。併せ記して此兩君に謝す。

明治四十四年二月

熱田中學にて　譯者

原著者に就いて

『スリー・メン・イン・ア・ボート』の著者ゼローム・ケ・ゼローム先生は英國現代の作家で、滑稽物に掛けては現に同國でも有數の人だらうと思ふ。始めは梨園界の人であつたが今日では重に文筆で立つて居られるらしい。昨年頃の『英語青年』には『我輩は猫である』の英譯者として名高い安藤貫が滯英中、ゼローム先生をマアローに訪問された時の記事が委しく出て、ゼローム先生の作中一番人氣が好いのは矢張『スリー・メン・イン・ア・ボート』らしい、『ジ・アイヅル・ソーツ・オブ・アン・アイヅル・フエロー』なて居るやうだが、一寸讀んで見た所では此『スリー・メン・イン・ア・ボート』と殆んど同工異曲とでも云つたやうなものである。安藤氏への手紙に自慢の作は『ザ・パッシング・オブ・ザ・サアド・ウローア・バック』

僕には矢張り其れよりも『スリー・メン・イン・ア・ボート』の方が他何んな作があつて、又何の作が面白いか僕には解らないが『オージ・エンド・オフ』だの『トミー・エンド・カンパニー』など云ふ作しい。ゼ・ローム先生に對する僕の僅少な知識は先づ此れだけである

欠

MISSING

のは、何病の處だつたかもう忘れて仕舞つたが——確か恐ろしく、打ツ壊すやうな疼痛が來るとあつたのは、今によく覺えて居る。——諸病徴候早わかりと云ふ處を、未だ半分とは讀んで見ぬ先から、僕はハ、アもうてツきり此奴にやられてるなあと思つた。

僕は恐ろしさの餘り凍りついたやうになつて、一時は憮乎坐つて居た。が何だか氣が落付かないから又頁を繙つた。今度は窒扶斯——一寸徴候書きを見たら——僕には窒扶斯熱がある。而も數箇月間其れを知らずに居たことを發見した。僕はまだ外に何があるかと思つた。で舞踏病の處を開けた。すると果して奴にも犯されてる。もう斯うなると何だか自分で自分の身體が面白くなつて來た。其處で一つどん底まで調べ拔いて見やうと決心した。先づアルハベット順に初めた。Ague（瘧）の處を見たらもう疾うから其れになり濟けて、いま二週間も經つたら、何うやら本物になりさうだつた。次はBright's

disease（腎臟病）、有り難いことには今罹つて居るのは、何うやら本物とは少し性質が違ふやうである。だから此病氣だけなら、今二三年の處は大丈夫、それから Cholera（コレラ）、此れは餘程こじれて居る。其次は Diphtheria（ジフテリヤ）此れは持つて生れて居る。僕は後生大事にアルハベットの順を逐うて一々研究した。其結果罹つて居ないと斷言出來るのは House-maid's knee だけに罹らなかつた（坐り蛸）だけだと云ふことが解つた。

初めは何だか癪に障つた。そして House-maid's knee のが、何だか馬鹿にでもされて居るやうに思はれて仕方なかつた。何故此奴に罹らなかつたらう、實に怪しからぬ。併し暫時經つと、此奴だけは無くつてもまあ勘辨してやらうと云ふ氣になつた。僕は診斷學に載つてるだけの病氣は悉皆背負ひ込んで居るんだから、さう慾張らんでもまア此奴だけは無くつても我慢して置かうと決心した。痛風も性質の惡い、而も恐るべき狀態をもつて居るし、又 Zymosis（醱酵病）には子供の時分から苦しめられて居る。併しNの次に來る病名はない筈だから、病氣はもう此れだけで相濟み申候である。

僕は凝乎と考へた。僕の身體は醫學上の立場から見ると、實に趣味津々たるもので、又教室の參考品としても誠に珍無類な逸品である。醫學生は僕を傍に坐らして置きさへすれば、態々病院へ往く必要はない。僕の身體が病院だ。だから奴等は僕の身體の周圍をぐる〳〵散歩してさへ居れば、其れだけで開業免許は早晩確かに手の中のものである。

僕は此の先何年生き延びることが出來るだらうかと思つて驚いた。で單獨で自分の身體檢査を始めた。先づ脈を見た。初めは全く脈搏を感じなかつたが暫時經つと不意に打ち出した。時計を出して計つて見ると、正しく百四十七回、今度は心臟を探つて見た。さツぱり在處が解らぬ。皷動は疾うに中止以つて、知らぬ間に取つ附いて居るし、

して居た。併し其後僕は心臓は確かにある筈の處に位置して絶えず鼓動して居たに違ひないと斷定することにしたが、其れも實際何うだか知れやしない。僕はそれから腰と呼ばるゝ部分から頭に至る身體の上部、横腹の邊、及び後背上部を少しづゝ輕く打いて見た。けれども別に異狀を認めなかつた。今度は舌だ。僕は出せるだけ長く舌を出した。そして片方の眼を閉つて、片方で精く檢査しやうと勉めた。すると唯だ舌の先の方が少し見えた。が其結果、猩紅熱に罹つて居ると云ふことを、以前より一層精確に知り得た。

僕は健全幸福の人として閲覧室に入つたのだが、出る時は半身不隨の病人となつて這ひ出した。

僕は行きつけの醫者の處へ出掛けた。尤も醫者と云つても僕の友達だ。行くと何時でも金も取らずに脈を見て呉れる。舌を出させる。そして人は大病だ位に思つてるのに先生平氣で寒暖の挨拶をする。だから僕は今行つてやつたら奴も少なからず利益を享けることだらうと思つた。

僕は『奴のやうな庸醫には何よりも先づ實地だ。奴これから我輩に診せて貰へるんだ。するとそれ、一人で辛く二つか三つしか病氣を持たない、平凡な千七百人の患者から得るよりも、斯く云ふ我輩一人から更により以上の地問題を提供して貰へる譯だ。』と獨語した。

僕は道草も喰はずに奴の處へ行つた。すると、

『何うだい、何か變つた事でもあるかい。』と云ふ挨拶だから、僕は、

『有るの何のつて、有る事を一々話した日にや際限がない。徒らに君に暇ツ缺きをやらせるだけのことだ。人の命は測られぬもので、僕が話して仕舞はない内に君がひよつとくたばらないものでもない。だから僕は無いものから始める。僕に無いものが一つある、House-maid's knee だ。併し外のものは皆有る。何故僕が此奴だけにやられなかつたのか、其れは疑問だ。兎に角此奴

だけは確かに無い。外の病氣は皆有る。』と言つた。そして此の事實を發見した次第を物語つた。

すると先生僕の胸の處を開けて、上から見下して、手頸を取つたかと思ふと、いきなり僕の胸元を打つた。(卑怯な仕業だ。)それから又自分の頭で僕を小突き廻した。そして居住居を直して處方を書いて、其れを疊んで僕に呉れた。僕は其れを衣兜に捩ぢ込んで出て來た。

途では開けて見なかつた。手近な藥劑師の處へ持つて往つて其れを渡した。すると奴其れを讀んで直ぐ僕に突き返した。そして斯んな品は持ち合はせませんと言つた。

『お前は藥劑師ぢやないか、』と詰問すると、

『はい、家業は藥劑の方でございます。ですからこれで若し共同販賣に、仕出しの方でも兼ねて居りましたら、或は又御用に立つたかも知れませんが、

何分私の方は藥劑一方でございますので、』と答へた。

處方を見たら斯んなことが書いてあつた。

一、ビフテキ一斤、

一、强性ビール二合、

右六時間毎に服用のこと。

一、毎朝十哩の散歩を爲すこと。

一、毎夜正十一時に就床のこと。

其他難解の事に頭を勞せざること。

此處方に從つた結果は極めて良好で——少なくとも僕の考に生き永らへて居る。

此處で話を肝臟圓の廣告に引き戻すが、僕は以前肝臟病の

て居た。就中僕のは「凡て仕事を厭がる傾向あり、」と云ふ其

しい奴だつた。

此奴の爲めに是迄僕が何の位苦しんだかは、到底筆舌の及ぶ所

僕は極く幼少の頃から、此徴候に囚はれて居た。其時分から一日と

氣が僕を見捨てたことはなかつた。而も誰一人僕が肝臟病だと知つてる者は

なかつた。醫學の進歩は今日と較べると、其頃はまだ餘程幼稚なもので、誰

でも僕の病氣を怠惰だからとばかり考へて居た。で僕さへ見ると、病氣だと

は知りもしないで、

『何時迄寐てるんだい、自分の飯位は自分で稼ぎ出さんか、馬鹿ッ。』と何時

でも斯うだ。そして丸藥どころか、頭の横ッ丁へ持つて來て、ぐわーんだ。

だが併し、斯う言ふと一寸妙に聞えるが、此鐵拳療法は、(勿論當座の間では

あつたが、)僕には存外利いたものだつた。僕は此奴を頂戴するが早いか、早

速飛んで起きて、爲れと云はれた事だけは一刻の猶豫もなく、ちやん〳〵と

やつて退けた。だから其頃よく頂戴した此腦天の瘤の方が、今日服用して居

る丸藥より僕には餘程利き目が多かつたと信じて居る。

斯んな簡單で野蠻な療法が、時に依ると大家先生御調劑の藥方よりも、數

等上の効果を齎らすことがある。

僕等は病氣の事を彼是議論しながら、一時間半許りも其處に坐つて居た

僕はジョージと、パリスに、朝起きがけに斯んな氣持がすると言つたら、

リスは寐しなに爾んな感じがすると言つた。するとジョージは最後に敗物

上に立ち上つて、僕は夜中に斯んな氣持がすると言つて、簡にして要を得

る説明を身振りでやつて見せた。

ジョージは自分では、これも何かの病氣だと考へて居るのだけれど、併し

奴は病氣とは全く沒交渉なんだ。

此時ポペット婆さんが、もう夕飯に掛られるかと言つて、とん〳〵扉を叩

いた。我々は顔見合はせてにやりと笑つた。そして少しは噛み込んで置いた方がよからうと思つてると答へた。ハリスは胃袋に愁ッか少許のものが溜つて居ると、其れが却つて病氣を堰き止める原因になると云ふ説だつた。ボペツト婆さんは皿を運んで來た。僕等は食卓に躙り寄つた。そして小ッぽけなステーキと、玉葱と、パイをなぶり喰ひにした。

其晩は食卓に向つてから三十分許りも居たが、別に何を食つて見やうと云ふ慾望も起らなかつたし、——平生は盛にやるんだけれど——又チーズなども更に欲しくなかつた處から考へて見ると、僕は實際其時は餘程弱つて居たに違ひない。

食後更に杯を滿たし、パイプに火を點けて、再び身體に關する談話を續けた。僕等は一體何病に罹つて居るのか、其れは誰にも解らなかつた。併し兎に角過勞の爲めだらうと云ふ事には、皆の說が期せずして一致した。

『必要なものは休養だ。』とハリスは言つた。

『さうだ、休養と境遇の變化が第一だ、何しろ腦を使ひ過ぎて其爲め身體の機能が狂つたんだから、異つた境遇に身を置いて頭を遊ばしてさへ置けば元に歸る。』とジョージは主張した。

ジョージは、違警罪何某と書いたペンで、巡査が何時も醫學生と肩書する一人の從弟があるだけ、一寸した事を解釋するにも何處となく藪醫者臭い點がある。

僕はジョージに贊成した。そして眼が廻るやうな雜踏地を遠ざかつて、引込んだ時代めいた處を搜して、其眠つたげな小逕の上に日向ぼつこしながら一週間も夢みて暮すか——或は婆婆ッけのない、神隱しにでも逢つて沿るやうな、人に忘られた岩窟か、——其れとも又十九世紀の大波が夢のやうに帰える、言はゞ鷲でも巢を組みさうな、全く社會とかけ離れた處か、——何れ

もそんな處を捜して見たら面白からうと發議した。

ハリスも其れは面白からうと言つた。そして自分でも今僕が言つたやうな處を知つて居るが、其處は誰でも晩は八時に寢て、錢金づくでも新刊物一つ讀めず、烟草一箱求めるにも草鞋がけで出かけねばならんやうな處だと言つた。そして、

『だが斯ういふ處は駄目だ。若し君等が變化と休養が欲しいと云ふんなら海に出掛けるに限るよ。』と附け加へた。

僕は海行きには盛に反對した。これが二ヶ月位もと云ふんなら海行きもいが、僅か一週間ぢや慘酷だ。

「諸君も思うて見給へ。大に浩然の氣を養はうと云ふ考で月曜日に出發するとする。先づ海岸に居並んで居る見送人にハンケチを振つて告別する。それから大きなパイプに火をつけて、自身がキャプテン・クックや、クリストファ・

コロンバスや、サア・フランシス・ヅレークの權化でもあるやうな氣で甲板を横行する、が火曜になると出ずに居ればよかつたと云ふ氣になる。水木金となると死に度くなる。土曜になつて始めて肉粥位は啜られるし、又甲板に坐る位のことは出來るやうになる。そして若し『具合は何うだ』と深切に見舞でも言つて呉れる人があれば、生氣のない、併し柔和な微笑を浮べて、二言三言の應答位はするやうになる。そこで月曜になつて始めて足が立つ、又固形物も食はれるやうになる。日曜になつて始めて甲板に上陸するばかりに身拵へをして、蝙蝠傘と鞄を持つて舷側に立つと、諸君は其時初めて海が戀しくなる。

僕は義兄が一度健康回復の目的で近縣旅行を企てたのを記憶して居る。先づ倫敦と、リバアプール間の往復切符を求めて出掛けたが、リバアプールへ着くと、何うしたら一刻も早く歸りの切符を人に賣り付けてやることが出來やうかと思つて、第一其事に心を碎いた。

Sir Francis Drake.
Yes!

その話によると、彼は非常に値を落して町中賣り歩いた結果、やつとの事で、折よく醫者から海濱に行つて運動するやうに勧められて居た青褪めた青年に、五六十錢で其れを賣り附けたさうである。

兄は切符を其奴の手に捩ぢ込むやうにして、

『海なら君、海濱より一段いゝよ。此れさへありや厭と云ふ程航海が出來るからね。なに運動だつて、そらあ君船に坐つてるばかりでも、家に居て蜻蛉返りするより、いくら運動になるか知れやしない。』と言つたさうだ。

そして彼自身は、汽車で歸つて來た。そして自分には汽船より西北線の方が健康上幾許宜いか知れやしないと言つて居た。

僕の知人で尚一人近海旅行を企てた男がある。出帆前賄方がやつて來て食物は食つた度毎に即時拂ひにするか、其れとも一週間分一時に誂へて置くかと訊ねた。

賄方は一週間分一時に誂へて置いた方が、大にやす上りで宜いと其方を推薦して、さうすれば一週間分廿五圓で請負ふと言つたさうだ。其話に依れば朝は魚肉の後に焼き物を出して、一時の晝食には四品、六時の晩餐にはソップ、魚肉、取り肴、卸し肉、鳥、サラダと、其れに茶菓と、チーズと、水菓子を附けて、夜の十時にも一度、何か輕いもので夜食を出すと云ふことだつたさうだ。

だから先生廿五圓がものは十分平らげられる積りで、（無論此男は大飯食ひではあつたが、）一週間分即座に註文した。

船がシーアネス沖にさしかゝつた頃丁度晝飯になつた。ところが思つた程腹が減らない。それで煮た肉を少し許りと、和蘭苺のクリームとで我慢した。そして先生、午後大に考へて見た。すると最近一週間許りが間と云ふもの、何時も煮た肉ばかり食つて居たやうにも思はるれば、又數年間續けざまに苺

入りのクリームばかり食つて居たやうにも思はれた。

肉も、苺のクリームも、皆有り難くないやうな氣もすれば、厭なやうにも思はれた。

六時に船の者が來て夕飯が出來たと知らせて行つた。ところがその案内が更に食慾を挑發しない。さうかと云つて食はずに置けば、廿五圓と云ふ大金がみす〳〵無駄になつて行くやうな氣がしてならぬ。だから帆綱だの、種々な物に摑まつて下りて行つた。梯子段の底へ來ると玉葱と、燒肉の美味さうな香が、揚げ物や、青物の匂とごつちやになつてぷーんと鼻へ來た。ところへ給仕がお愛想笑ひをして、

『旦那何に致しましやう。』と訊ねた。すると先生もう反吐が出さうな聲で、

『何もいらんから、直ぐ甲板へ連れて行つて貰ひ度い。』

其處で船の奴等は早速彼を甲板に昇ぎ上げて、吹き曝しへ連れて行くと何

かに倚凭らせたまゝ、放つときぼりを喰はせた。

それから引き續き四日間と云ふもの、先生それこそ精進潔齋で、キアビテンズ・ビスケット（と云つても薄ツぺらなビスケットで、船長のビスケットと云ふ意味ぢやない。）と、曹達水とで命を繋いで居た。併し土曜日近くなると次第に元氣が出て、食堂へ行つて、茶や、燒パン位は食へるやうになり、月曜頃になると、小鳥のソップまで平らげられるやうになつた。そして火曜には船を出たさうだが、上陸した波止場から、烟を吐いて去る汽船を恨めしさうに目送して、

『畜生め去きやがる。あーあ、箸も附けなかつた甘圓の食物をたゞ取りして置いて。』と呟やいたさうだ。

もう一日船に居さへすれば、あれだけの食物は悉皆腹に詰め込んで來るんだつたにと、先生後になつても其事ばかり言つて居た。

これだから僕は海行きには反對した。それには今言つたやうな譯があるからで、決して船に弱いからではない。僕は憚り乍らまだ此の年まで船に酔つた例がない。が併しジョージは何だか怪しいと思つた。すると又ジョージはジョージで、俺は大丈夫、船は却つて好きな位だけれど、君やハリスが險呑だから、まあ〳〵船は思ひ切れと勸告し度いと言つた。ハリスは默つて居ない。世間の奴等は海にさへ行けば何うしてあんなに船に酔へるのか、(或はみえに船酔をやるのかも知らんが、)自分はいくら勉強しても船に酔へないで困ると言つた。

それからハリスは、外の奴等は皆、寢臺の足に身體を縛りつけられて居た位海がひどく荒れた日に、イギリス海峽を乘り切つた時の手柄話をして、其時酔はなかつたのは、俺と船長ばかりだつたと言つた。其時は何うかすると奴と二等運轉士のみが元氣な事もあつたが、大概の場合奴といま一人の男が

元氣だつたさうだ。そして其いま一人の男と云ふのとハリスと二人の中で、若しも酔つて居ない者があれば、其奴は屹度ハリス自身だつたとさ。

妙な事だがまだ陸上で船酔をやつた者はない。海だと船酔がざらに居る。いやもう船一杯酔つた者だらけのこともある。だがまだ僕は陸で船酔をやつたと云ふ奴に出會はしたことがない。あのまあ船で見る澤山の船酔連中は一旦陸へ上ると何處へ姿を隱すものか、僕は何うも不思議でならん。

併し大概の奴は僕が一度ヤーマス(英國東南岸)で見たやうな醜だとすれば此謎は直ぐ解ける。何でも丁度サウセンドの直ぐ沖の處だつた、野郎今に滑り出しさうな風體で船窓に倚り凭つて居るから、僕は助けてやらうと思つて、傍に行つて、

『おい、君、もちつと入つて居ないと危いぜ、落つこちるといけない。』と言つて手を掛けて忠告してやつた。すると、

『旦那後生だから構はんで置て下さい、落ちりやあ其方が却つて助かりまさ
あ。』と斯うだ。仕方がないから僕は其儘放つて置いた。
それから三週間許り經つて、僕はバース・ホテルの喫茶室で、此男が何か航
海の話をしながら、だから海は忘れられぬなんてつて調子づいて居るのを見
掛けた。野郎其時一寸自分の方を振向いて、羨ましさうに何か訊ねて居る一
人の青年を相手に、
『え、私が船に強いと言ひなさるんですか。併し私もこれで、一度ひどく酔
つたことがありましたて。こらあ有體のお話ですがね、左樣ケープ・ホーン
(南亞非利加の南端)の沖でした。船は其翌朝粉微塵になッ仕舞ましたがね。』
と言つて居た。其處で僕は、
『何だお前はサウセンド沖で人一倍船に酔うて、海に落ち込んでもいゝなん
て弱音を吐いたぢやないか。』と突込んでやつたら、野郎さも狼狽した顏付で、

『へえ、サウセンドですつて、』と聞き返した。
『さうだとも、三週間前の金曜日だつた、ヤーマスへ行く途中だつたよ。』
と疊みかけてやると、
『はゝア、解つた。あれですか、』と赤くなつて、
『さう、さう、今思ひ出しました。併し彼の日は少し具合が惡かつたんです。
あの時は私も實に意外でした。船は立派でしたが、併しあんな目に逢つたな
あ始めてゞさあ。お前さん何うでした彼の日は?。』とぼけて居た。
僕は獨りで身體の平均を取り乍ら船酔を防ぐ奇妙な方法を發見した。其れ
は船の眞中に突ッ立つたまゝ船が搖り上げたり、搖り下げたりするに從つて
轉ばないやうに自分の身體を船と共に前後に動かすのである。だから船首が
上つたら鼻が甲板につかへる迄前にのめり、今度は船尾が上つたら、又反對
に後ろへ反る。尤も一週間も續け樣に斯うして身體の平均を取つてばかり居

る譯には行かんが、一時間か二時間位の間なら、此方法で巧く行く。

『河にしやうぢやないか。』とジョージが言ひ出した。

其説に依れば、河だと新鮮な空氣も吸はるれば、運動も休養も得られる。同時に景色の變化は心（其中には矢張りハリスの心も一人前として勘定してある。）を喜ばせ、激しい運動は食慾も挑發すれば、從つて又安眠の媒介ともなると云ふのであつた。

ハリスはジョージに、平生以上の睡眠に陷らせるやうな激しい運動を毎日やるのは危險だと言つた。そして夏冬共に一日は一日で矢張り廿四時間しかない以上、ジョージが今よりもつと澤山寢やうと言ふのは、一體何う云ふ料簡なのか、自分には更に解し兼ねる。併し兎に角、ジョージがもつと長く寢ることになれば、それこそ死んでるのも同じだから、食料は確かに經濟になる勘定だと言つた。

併しハリスも河ならぴたりと自分の考に當て嵌まると言つた。要するに誰も河には賛成だつたらしく思はれた、此れは第一河の面目にもなることで何より結構な譯である。

河は又僕にもぴたりと氣に入つた、そして僕はハリスと口を揃へてジョージは好い思付きをしたと言つた。言つたはいゝが其口調には、何だか斯う、河とはジョージには過ぎた思付きだから驚くと云つたやうな所もあるやうに思はれた。

ジョージの名案に感服しなかつたのは、モントモレンシーだけだつた。大將河だらうが、何だらうが、更に關せず焉である。

奴斯んなことを言つてる。『河はお前さん達にや結構さ、皆河が大好きなんだから。併し俺あ嫌だ。河だと何もやる事がない。景色だつて俺にや解らん

し、又俺あ其れを眺めながら烟草を吹かさうつて云ふんでもなしさ。又俺がひよつと鼠を見つけたからつて、お前さん達あ其れを捕らせちや呉れまいし、又船で居眠りでもしやうもんなら、お前さん達あ船を揺つて俺をどぼんとやるだらう。だから若し河は何うだつて云ふ相談なら、河は馬鹿げてるから止めさつしやいと言ひ度いんだ。』

二

地圖を開いて方略を相談した。

其結果次の土曜にキングストンから出發して遠漕をやらうと云ふ事に収り極めた。ジョージは午後にならんと市外へ出る譯に行かないから、先づハリスと僕が早朝キングストン迄出掛けて、前以てチエルトシー迄ボートを廻して其處でジョージを待受けて居やうと云ふ事にした。(ジョージは土曜を除く外毎日午前十時から午後四時迄銀行へ晝寢しに行く。併し土曜日には午後二時に家の者から叩き起されて外へ追出されるんだから、此日だけは例外である。)

遠漕中は野營する事にしやうか、其れとも又宿屋に泊る事にしやうかと云ふ議論が大分八ケ間敷かつた。

ジョージと僕は野營の方が賛成だつた。何故つて此方が自由で、放逸で、又古風な所があつて面白いから。

夕陽の黄金色の名殘が淋しい雲間から次第〳〵に薄れて行く。鳥はぴつたり囀を止めて歔欷する小兒のやうな淋しさが其跡を支配する。すると水鳥の陰氣な叫び聲と水雞の恐ろしい鳴き聲とが相交つて、夕日が今最後の光を投げた岡象沼に漂ふ寂寞を掻き亂す。

薄暗い兩岸の森から灰色の夜の影が靜かな足掻を揃へて、さまよふ殘照を

追ひまくるやうに這ひ出して來ては、水に動く岸邊の草を渉り、吐息つく蘆の葉の間を潜つて、音もせず眼にも見えぬ足取で歩いて行く。すると夜は烏羽玉の玉座から暗がり行く世界の上に、其黒い翼を擴げて、青白い星に照り返されたその妖魔の如き宮居から地上の寂寞を監視する。

其時何處か穏かな岩陰へボートを漕ぎ入れて天幕を張る、そしてうつまやかな夕餉を拵へる。夕飯が濟むと大きなパイプに火をつける。其處でしめやかな樂を奏でるやうな談話が始まる。話の絶え間〳〵には船縁を舐る河の水が、古き世の珍らしいお伽噺や、隱れた秘密をさゝやいて、今迄千年も萬年も歌ひ續けて居た新しい歌——又これからも歌ふ聲が響れる迄永久歌ひ續ける歌——を唄つて呉れる。僕等は此時耳を欹てゝ聞く歌の筋を具に人に傳へる事は出來ないが、幾分之を了解することは出來る。

河の岸に圍座して居ると、河を慕ふ月が同胞のやうな懐しさで水の面に接

吻しやうとして上から覗き込む。そして銀のやうな腕をなつかしげに其岸に投げ掛ける。河は歌をさゝやき、私語を繰返して、母なる海と合するまで何處迄も〳〵流れて行く。僕等は話聲が寂寞の中に途切れるのも知らずに其れに見惚れて居る。——其日暮しの淺墓な我々も何時の間にか考へ深くなつて、恐ろしいやうな懐かしいやうな氣持になる、そして話して見やうとも思はねば、又話し度くもないやうな氣になる。——お仕舞にはハヽアと笑ひ出す、立ち上つて火の消えた烟管から吸殻を叩き落す。『お休み』と言つてころりと臥る。ぴた〳〵いふ水の音と、さら〳〵と鳴る葉摩れの音に寢せ付けられて大きな靜かな星の下で熟睡する。そして世界が若返つて居る夢を見る。——さうだ世界が惱み苦しみの爲め其美しき頰に醜き皺も彫られず、又人の罪咎が其心をも老いしめなかつた以前、——世界が神に造られたまゝで、其愛子なる我々を其胸に抱きしめて居た時代——語を換へて言へば箔を着た僞の文

明が我等を此自然なる母の腕から拉し去つたり、或は毒せられた技巧の嘲が、昔我等が此母と共に營んで居た質素な生活や、數千年前我等の祖先が生み落された素朴な而も神々しい住家を嘲つたりするやうになつた以前の、美しい世界に若返つて居る夢を見る。」

ハリスは『若し雨が降つたら何うしやう。』と言つた。

ハリスは何事にも驚く男ぢやない。其代り此男は詩が解らないんだ——だから永遠に憧れるなどと云ふ處は、いくら捜したつて彼には發見の出來つこがない。其れは現在自分でも不思議だと言つて居り乍ら、まだ此男が涙を零したことがないのでも能く解る。だから若しハリスの眼に涙が溜つて居ることがあつたら、其れは玉葱を噛つて居るか、さもなければウスター産の辛いソースを舐めたからだと合點して貰ひ度い。

だから若し夜遲くハリスと海岸にでも行くことがあつたら、

『おい君、海の底で何かぐづ〳〵言つてるやうだが、ありやア人魚か船靈が、海草に引つかゝつた髑髏に、何かお念佛でも上げてるんだらうか。』と訊いて見給へ。するとハリスは屹度君達の腕を取つて、

『冗戯言つちやア困る。君ア風邪でも引いたんぢやないか。まア少し歩いて見やう。此先の角を一寸曲つた處に行くと素敵なウイスキーを飲ませる家があるよ。君なんかまだ迚もあんな奴を飲んだことはあるまい。何うだ一杯やらうぢやないか。すると風邪なんか直ぐ治つて仕舞ふよ。』とやり出すから。

ハリスは又何時でも、所謂此先の角を一寸曲つた處に無類飛切りの奴があると云ふ事を能く心得て居るから不思議である。誰か極樂でハリスに會つたら（先づ極樂へ行けるものと假定してさ）奴、屹度、

『やアよく來たね。君、僕は此先の角を一寸曲つた處に甘い家を發見してる

が、其處に行きやア君上等の神酒が飲み放題だよ。』なんてつて大に諸君を歡迎するに決つてる。

餘談は措いて此場合、『若し雨が降つたら何うしやう、』と云ふ〻野營に關するハリスの實際的提案は、極めて時宜を得たものであつた。實際雨の日の夜營は餘り感心したものぢやない。

晩の事だ、誰も彼もびし〳〵濡れになつて、ボートには二寸も水が溜つて、お負けに何も彼も腐る程濕つて居る。其時君達は岸へ上つて比較的乾燥した場所を捜す。そして天幕を引きずり出して二人で其れを張りにかゝる。

漬つたやうに濡れて重くなつた天幕は風の爲めにばたばた煽つて、其拍子に誰かを引つくりかへす。そして顏や首にぺた〳〵へばりつく。癪に障らざるを得ない。而も其間雨は土砂降りに降つて居る。天氣がい〻時でさへ天幕を張るのは厄介だ。雨の日だと實に手に了へない。一緒に張つてる奴が手助

けになるどころか却つて自分の邪魔になる。自分で辛く自分の方を立て附けると彼方からぷいと引く、其拍子にばたりと自分が倒れる。

『おい、何してるんだ。』と言ふと、

『何してるつて何故君の方を弛めないのか。』と却つて彼方から喰つてかゝる。

『おい、さう引いちやアいかん。そら見い、土だらけになつたぢやないか、糞つたれが！』とも一つ此方からやり込めてやると、

『乃公が知つた事か、だからもつと弛めろつてんだ。』

となか〳〵負けて居らぬ。

『何だ、貴樣がこんなにしたんぢやないか、』と今度は毆打りつけてぐもやり度いやうな氣になつて、又一つぴんと引つ張ると、其途端に彼方の杭が拔けて仕舞ふ。

『馬鹿だなア君は、』と言ふ聲と同時に又彼方から厭と云ふ程引つ張る。再び

ばたりと倒れるに至つては腹も立つ。其處で槌を投げ捨てゝ、一つ意見を聞はす積りですた〳〵相手の方へ出掛けて行く。同時に彼方の奴も矢張り意見發表の爲め此方へ進み寄る。そして互に惡口を言ひ合つて天幕の周圍をぐるぐる廻る。其間に天幕はばつたり倒れて堆くなつて居る。不圖氣が付いて立ち止まると、倒れた天幕を隔てゝ、互に向ひ合うて佇立して居るのを發見する。そこで取敢へず、

『何だ、そんな處にぼんやりして。乃公が今言つた事が解らなかつたのか、馬鹿だな貴樣は。』とへらず口を利く。

其れまで袖から下はびしよ濡れになつて、十分間程續けざまに一人でむかつ腹を立てゝボートの水を汲み出して居たもう一人の奴が、此時傍へやつて來て、君等は何故天幕も張らずに怒鳴つてばかり居るのかと詰問する。

何うか斯うか天幕を張り了ると、今度はボートから種々な物品を其内へ運び入れる。けれども火を起さうなんてつたつて、そんな事は到底出來ない相談である。だからアルコールランプのストーブに點火して其れを取り圍む。

夕飯の主成分は雨水である。パンは三分の一雨になつてバイなどは濱つたも同然、其他ジヤミも、バタも、鹽も、珈琲も皆雨水に溶解してソップが出來さうになつて居る。

夕飯が濟んでも煙草が濕つて居て役に立たぬ。併し少しやつて置けば兎に角興奮劑位にはなるだけのものが瓶の底に少し殘つて居る。其お陰で先づ床に入るだけの元氣は何うにか回復する。

其晩は象が腹にとまつて、火山が破裂して、自分は海の中に投げ込まれて、而も象は尙ほすや〳〵と胸の上に眠つて居る夢を見る。がばと跳ね起きて天災が起つたのかと考へる。最初は地球が破壞したのかと思ふ。否やそんな筈はない。盜賊か、人殺しか、それとも火事かなアと思ふ。そして不思議にも

斯んな考を平氣でしやべつて居る。けれども誰一人助けに來て呉れる者はない。助けに來るどころか大勢の者が寄つてたかつてどん〳〵自分を蹴り付ける。今にも息が止るかとはら〳〵思つて居る。

誰かもう一人自分と同じやうな目に逢つてる者がある。助けて呉れと言ふ聲が幽かに寢臺の下の方に聞える。自分は到底生命はないつもりで一生懸命に腕く。腕と脛を左右前後に叩きつけて聲を限りに叫ぶ。すると不意に何處か隙が出來て自分は何時の間にか野天の下に立つて居る。氣が付くと足元から二尺とは隔らぬ處に片肌抜いだ一人の惡漢が今にも切り付けるばかりに身構へて此方向きに突つ立つて居る。はツと思つて死物狂ひに喰つて懸らうとすると何だ其奴は友達のジム坊である。彼方でも同時に此方を認めて、

『何だ、君かい。』と言ふ。此方は眼を擦つて、

『一體何うしたんだ。』と訊くと、

『なに天幕が倒れたんだよ、ビル君は何うしたい。』と怪けて居る。

其處で二人は聲を限りに、『ビル君、ビル君、』と叫ぶ。と足の下の方が高くなつたり持ち上つたりする。暫時見て居ると何か物に包まれたやうな而も聞き覺えのある聲が天幕の下から聞える。よく聞くと、

『おーい、頭を離して呉れエー』と叫んでるのだから可笑しくなる。

ビル君は泥まびれの、踏みにじられになつて、而も大に挑戰的態度を取つて天幕の下から這ひ出して來る。そして自分で窄にかけられたんだと思つて居るから始末が惡い。

夜の間に風邪を引いて朝起きた時は誰も彼も無言の業。少しすると三人共ぷん〳〵怒り出して、朝飯の間は惡口のほざき合ひだ。

これだから僕等は快晴の時のみ野營する事にして、雨が降るとか又少し變

化が欲しいとか云ふ場合には、世の紳士紳商の類がやる如く、その木賃宿たり、旅籠屋たり、ホテルたるを問はず、勝手次第に御輿を下すことに取り極めた。

モントモレンシーも大に此中間説に賛成した。此奴は元來騒がしい事が大好きで、詩的閑寂の味などはてんで解せない奴である。だから奴さん唯だ騒がしい事でさへあれば何でもいゝのだ。下らなければ下らない程益々其れが好きである。モントモレンシーを熟視すること頃刻にして、諸君は必ず此れは何か人間に言はれない甚深至妙なる理由の下に、神假りに野良犬の形相を此奴に附與し、特に之を一匹の天使として此大千世界へ下し給はつたものであると云ふ事を考へずには居られなくなる。そして此奴生意氣にも『厭な浮世だ、改善しろ』ッてな面付をして居る。善男善女が見たら嘸かし嬉し涙に咽ぶことだらう。

此奴が初めて僕の手足纏ひになつた時、僕は迚も殪ひ殺してやる譯には行くまいと考へて居た。で奴が襤褸の上に轉がつてしよぼ〳〵僕を見上げると、僕は又其側に坐つてつく〴〵其顔を打ち守りながら、『何うせ遠からず往生だらう、だがそれも運命とあつて見れば仕方がない。』としみ〴〵こんな事を考へて居た。

併し其後奴が喰ひ殺したからと云つて一ダース許りの雛子の尻を持ち込まれたり、きやつ〳〵と云ふ此奴の首輪を引ッ摑んで、百四十街の犬合戰から引き離してやつたり、『これを見ろ、お前さんは猫殺しぢや。』と言つて、此奴が嚙み殺した猫の死骸を靑筋をうねらした山の神に見せつけられたり、どら犬をぼつ放して置くものだからお陰で門口一寸顏出しもならず、二時間が間と云ふもの火の氣もない仕事部屋に押し籠められてい〳〵迷惑をしたと、一軒置いた先隣の老爺にさん〴〵苦情を持ち込まれたり、其名は忘れたが何處か

の園丁で、暇潰しに三時間ばかり此奴をぼい廻して鼠を捕らせ、お蔭で十五圓も儲けた奴があると云ふ話を聞かされたりしてから、僕も此分なら大丈夫此奴も今暫時は人樣に生かして貰へるぢやろとそろ〳〵安心の臍を固めるやうになつた。

馬小屋を嗅ぎ歩いたり、町中で一番評判の悪い野良犬共をかり集めて其先頭に立ち、これも悪事にかけては引けを取らぬ外の野良犬仲間に喧嘩を吹きかけたりするのを、モントモレンシーは生活の全部だと心得て居る。これが前に言つた通り、奴が木賃宿説、各府縣御定宿説、乃至某々ホテル宿泊説に大賛成を表した所以である。

斯くの如くにして如何に寐る可きかの問題は滿足に解決された。もう一つ取り殘された問題がある。曰く何を持つて行く可き乎。併し愈々此議案に移らうと云ふ時になつて、ハリスは長時間議論をやつたので、厭になつたから、

今度は一つ何處かへ出掛けて行つて、笑語諧謔を恣にしやうぢやないか、其れには幸ひ横町の角を一寸曲つた處に甘い奴を飲ませる家を發見して居るからと發議した。

ジョージも又大分饑ゑて來たと言つた。(が二六時中まだ此男が饑ゑて居なかつた例はない。)それに僕も實はウイスキーの熱い奴にレモンを一寸加へて一杯やつたら、痛みが柔らいでよからうと考へて居た矢先だつたから、滿場一致で議論は明日迄繰り延べと云ふ事に決つて、無慮三名の一行は帽子を被つて外へ出た。

三

其翌晩作戰計畫を討議する爲め僕等は一堂の下に會した。ハリスは。

『何を持つて行くか〳〵先決問題だよ。だからゼローム君、君は紙を一枚持つ

て來て其れに必要品を書き留めて見ないか。それからジョージ貴樣はなア、雜貨商の目錄を一つ見付けて來ないか。そして誰か鉛筆を一本貸して呉れ、僕が一つ目錄を書いて見やうから。』と言つた。

ハリスは何時も斯うなんだ。初めは一緒くたに何も彼も自分一人で背負ひ込んで置いて、然も其の尻拭ひは一々人にやらせやうと云ふんだから狡猾い。

僕はハリスを見ると伯父のポッヂアを思ひ出す。此伯父は手間仕事をやると云つては何時も一家中を引つ掻き廻すやうな騷動をおつ始めるが、斯んな騷ぎは未だ誰だつて目擊したことはあるまい。扁額が額緣屋から出來上つて來て、一時も早く掛けて貰ひ度いと云つたやうな顏付をして居間に立てかけられたまゝになつて居る。と伯母がこれは何うしたらいゝでしやうつてな事を言ひ出す。すると伯父は大呑み込みで、

『それは乃公がやるからお前達は心配しなくつてもいゝよ、なにそれ位のもの

のなら乃公が一人でやつて見せるから。』と言つて早速上衣を脫いで仕事にかゝる。先づ釘を廿四錢も買つて來いと命ひつけて娘を走らせる。後で直ぐ、

『やアしまつた、大きさを言つてやるのをすつかり忘れた。』と言つて、男の子を追蒐けさせる。此れをきつかけに伯父はそろ〳〵活動を始めて一家中の者を煙に卷く。

『ウィルやお前一寸走つて金槌を取つてお來で。それからトム坊、お前はなあ、尺竹を一本持つて來て貰ひたいんだ。待てよ、かうと、足臺が一つ欲しいなア。さうだ、臺所に椅子があつたやうだ、あれを持つて來た方がよからう。それからジムや、お前は一寸ゴッグル さん處へ行つて脛のお痛みは如何で御座いますか、お父さんが宜敷申上げましたつてよくお見舞を言つてなア、申兼ねますが水準器を一つ拜借致し度う御座いますがつて。それから、おいおいマリヤ、お前まで行つちやこまるぢやないか。お前は此處に居てお父さん

にランプを見せて呉れなきやア。それから姉さんが歸つて來たらもう一度紐を買ひに行つて貰うんだよ、いいかい。おやトム坊は何うした、——おう其處か——お前早く此處に來て、今お父さんが足臺に上るから、お前下から其額を取次いで呉れなくつちやア。』

さて椅子に乘つかつて額を上げる段になつて、今度は其れを取り落す。其拍子にがたり額緣が外れる。ガラスを割るまいと焦心る間に指を切る。ハンカチは何處だ〳〵と言つて室中飛び廻る。容易に見つからぬ。其筈だ、ハンカチは先刻脫いだ上衣に入つて居る。今度は上衣の置場を忘れて居る。家中の者は道具を探すのを止めて上衣を見付けにかゝる。伯父は其間びん〳〵飛び廻つて外の者の邪魔をする。そして、

『家中總がゝりで乃公の上衣の在處一つ知れないのか、こんな馬鹿げた事は初めてぢや。六人も掛つて何をしてるんだ。つい今し方脫いだばかりぢやないか、馬鹿〳〵しい。』と言つて立ち上ると、豈計らんや夫子自ら其上に坐つて居るのだ。少しはきまりも惡いもんだから、

『もう探さんでもいゝよ、乃公が見つけたから。物見付けならお前達より猫の方が幾許ましだか知れやしない。』と滅らず口を利く。

三十分もかゝつて漸く指の繃帶が濟む。ガラスが取換へられる。そして道具一切、梯子、椅子、蠟燭までちやんと揃つて仕舞ふと伯父は又始める。妻子、眷族、下女、下男、日傭ひの洗濯婆に至るまで、おいそれと手助けの用意をして單縱陣を作つて並ぶ、二人の者が椅子を摑まへて、三人目の者が其上に上らせて腰をつかまへる、四人目が釘を取次いで、五人目が金槌を持たせる、と其拍子に釘を取り落す。

『やい、釘が落ちたぢやアないか。』と伯父は人の所業のやうに怒り付ける。群雀の一聲恐れを爲して跪き、四つん這ひになつて釘を探す。其間伯父は

泰然と椅子の上に身搏へて、今夜中に間に合ふのかと傲語する。

漸く釘を見付けて拾ひ上げてやると今度は又槌を取落す。

『おや金槌は？、金槌は何うしたい。何だ貴様達は口ばかり明けてやがつて。金槌を何うしたか解らないのか、頓馬が。』

金槌を見付けて貰ふ間に今度はちやんと壁に付けた印の處を忘れて了ふ。

一同総掛りで椅子に上つて其れを探す。皆の説が一々違ふ。伯父はいよ〳〵怒り出して、誰も彼も馬鹿だと言つて椅子から追ひ下らす。定木を取つて又、尺を取り直す。そして漸くの事で隅から三十一インチと八分の三の處だつたと解る。其れを頭の中で換算しやうとして又肝癪を起す。

椅子の下でも皆思ひ〳〵計算をやつて見る。然も一々答が違つて出る。一同思案に餘つてにやり、にやりとやる。其間に誰も彼も初めの數まで忘れて仕舞ふ。伯父は又尺を取り直す。

今度は紐で尺を取る、椅子の上から四十五度位の角度でのさばり出して、今三寸だけ身長が高くなければ手が届かぬ處へ、強て手を上げやうとする途端にずるり糸が滑つて、伯父の野郎ピアノの上へどたりと落る。

厭と云ふ程頭と闇體を打ち付けられたピアノは、があーんと鳴つて一時に高低清濁の諸音聲を併せ調べる。

伯母は伯父の側に子供を立たせて悪口を聞かせ度くないと言ひ出す。

やつとの事で釘を打つ場所が極まる。左の手で釘を握つて其場所へ持つて行く。右の手で金鎚を持つ。打ち下したかと見てる間に、左手の拇指へ痛いと云ふ程喰はせる。『痛ッ』と言つて誰かの足指へ槌を取り落す。

伯母は其時小さな聲で、今度こんな釘を打ち付けなさる時は一言前にさう言つて頂戴。そしたら私暫く里へ歸つて逗留して來る用意をしますからと言ふ。すると伯父の野郎眞赤になつて、

『女なんつて眞個に仕方がないもんぢや、何事にも仰山らしくばかり言ひ居つて、乃公は總體こんな手間仕事が好きだからやつてるんぢやないか。』と怒鳴る。

惡口を言ひ〳〵又始める。一旦釘を打込んで、又も一度其上から打ち下すと、今度は槌の頭が壁に辷つて、同時に力が餘つてよろ〳〵と先へのめる。ともう少しの事で鼻柱をゆがむ程壁へ打ち付けやうとする所で危く踏み耐へる。

外の者は又定木と糸を捜してやる、新しい穴が又も一つ壁へ穿たれる。漸く眞夜中頃歪み傾いて今にも落つこちさうな姿勢を取つて額面が壁に懸かる。然も壁の面は方三尺が程熊手で滅多打したやうになつて、家中で打たれない者は當人の伯父殿ばかり。

『これで申分なしぢや、』と言つて伯父は椅子を下る。其拍子に洗濯婆さんの

足の肉刺を踏みにじつたのも氣付かずに、矢張り額面を自慢らしく見上げながら、

『これ位の事をやるのに態々人を雇ふ奴の氣が知れん。』

と獨りで勝手な熱を吹く。

ハリスは後年になつたら屹度此伯父見たやうになる。で僕はハリスにさう言つて、そして何も彼も君一人で引受けんでもいゝぢやないかと言つて、『だから君先づ紙と鉛筆と目錄を持つて來たら何うだい。そしてジョージに書く分は書かせたら。其先は僕が引受けることにしやうから。』と言つてやつた。

初め作つた携帶品目錄は破棄せねばならぬ事になつた。テームスの上流と云ふからには、入用品を皆積込んだボートを自由に操るだけの餘地は覺束ない。だから最初に作つて見た目錄は引き破つて三人顏を見合せた。其時ジョ

ージは、

『僕等が間違つてるよ。入用な物から記入して行つた日にや何時になつても際限がない。だから僕等は宜しく是非無くつちやならない物から記入す可きだよ。』と言つた。

ジョージも時には解つた事を言ふから驚く。此説は單にテームス河を遡る場合に限らず、之を大にしては人生と云ふ大きな流れを遡る場合に當て嵌めて見ても又立派な考である。實際邪魔になるばかりで何の役にも立たぬ品物を、何れも此れも必要缺く可からざるものだと心得て、船が覆る程澤山積込む馬鹿者も世の中には少なくない。

先づ美衣高樓の如きを初めとして、役にも立たぬ下女下男、自分に取つて鐚一文の得にもならず、又此方から進んで爪糞程の犧牲を拂はうとも思はぬ友達、招待しても心から喜ぶ者もない宴會、虚僞、虚禮、外見、外聞、殊に世

間では自分の事を何う思つて居るだらうと云ふ要もなき取越苦勞、身を滅ぼす快樂、苦痛の種を蒔く贅澤三昧、數へ來れば斯んな餘計な品物を船一杯積込む連中が少なくない世の中である。

斯んな物は皆厄介だから宜しく海中に遺棄す可きぢや。餘り矢鱈に積込むと荷が勝つて船が漕げぬ。お仕舞にはオールと討死だ。荷が重いのは危險で、厄介で世話心配が絶えず、眠いからつて居睡り一つする譯に行かぬ。況んや淺瀬に遊ぶ魚のひら〳〵影、漣に翫ばれて見え隱れに閃く日影、岸から覗き出して水鏡を見る大木、綠の森や黄金の森、黄に白に綴る百合の花、吐息つく蘭、菅、藺、忘れな草の青いのやなんか、到底心から樂しむ餘裕は出ない。

だから邪魔な物は放棄するに如かずだ。人生の荒波を乘り切る船には須らく實際要る物だけ積み込んで、所謂實用向きに仕立てゝ、質素な快樂、交友

の二三、其れも信するに足る友を選んで、互に愛し愛せられ、其他は猫一匹、犬一頭、烟管を二三本も用意して、衣食は不自由をせぬ程のもの、併し喉が渇くのは険呑だから、飲料水を少し餘分に見積つて行けば其れで澤山である。船を斯うして出掛れば、動かすのが樂で覆る心配もなく、又よしんば覆つたにした處で、精選した實用一方の品物だと水にも塡まるから安心である。これだと考へる時間もあれば働く時間もある。加之人生を味ふの時、人の心の緒琴を揺つて神が調ぶる樂聲に耳を欹てるの時、曰く何の時、曰く何の時……數へ來れば殆んど僂指に遑なしだ。

御免を蒙り度い。話が他處に外れて、何を言つてたのか一寸忘れて仕舞つた。

さうだつた、ジョージに目錄を書かせることにして、ジョージが其れを引き受けた處で話を切つて居た。

『天幕は止さうぢやないか、そして其代り何か覆ひになるものを持つて行く事にしやう。其方が簡單で具合もいゝから、』と此れはジョージの說だつた。

成程名案だ。我等は其說を採用することにした。諸君はまだ御經驗になつたことがないかも知れんが、先づボートの緣から緣に鐵の環を渡して、其上に幕を張つて裾を船緣に括り付ける、すると ボートは一見家見たやうな形を取る。少し窮屈ではあるが、一寸きまりが附いていゝものである。

ジョージは各自に毛布一枚、ランプ、石鹼、ブラシ、櫛（此れは共有にして）齒みがき楊枝、（一本宛）金盥、齒みがき粉、それから剃道具（と言へば佛蘭西の遊戲のやうに聞えるが、さう聞えませんかね、諸君には）それから水浴用のタヲルと、此れだけ持つて行くことにしやうと言つた。

人は總體溫泉に行く前などには得て仰山な入浴準備をやるやうである。が扨て出掛けて往くと、何うしたものかたんと湯にも浴らないやうである。

海岸へ行く場合が又さうで、まだ倫敦に居る間は、朝は毎朝早くから起きて、飯前には屹度一度水に浴りに行かうと決心する。で、ちやんと水浴用のタヲルとズボン下まで用意する。(僕はズボン下は何時も赤地のを作らせて置く、僕は色地は赤が大好きだ。僕には此れが一番能く似合ふ。)だが一旦海岸へ着くと家で考へて居た程水浴が珍らしくないやうになる。

いや實は全く反對で、朝は寢られるだけ一分でも長く寢て、いざ朝飯と云ふ段になつて漸く床を出る。それでも一二度は良心が勝つて滯々六時に床を出て、不性無性に着換へをする。そしてズボン下とタオルを持つて出るには出て見るが更に面白くない。早く起きて海に行く時に限つて嚙むやうな東風が吹く。道には三角形の礫がざらに散らばつて、態と尖らしたやうな岩角には砂を吹きかけて一寸見た位では解らぬやうにしてある。其處へもつて行つて海水は二哩許りも海岸から沖の方へ退いて、水につかるには腕を抱いてぶる〳〵顫へながら、脛も沒せぬ位な處をぴん〳〵飛んで行かねばならぬやうになつて居る。癪に障るけれど兎に角深い處まで行つて水につかつてやると、今度は浪が荒くつて人間を木の葉扱ひにして居る。

大きな波がいきなり自分を引つ浚つたかと思ふと、特に備へ付けてでもあるのかと思はれる岩の上へぷーいと運んで持つて行く。『おう』と泡喰つて居る隙もあらばこそ、今度は又返す浪が捕まへて大洋の眞ん中へ連れて行く。はつと思つて一生懸命になつて、岸へ向つて水を掻く。あーあ國へ歸つて再び朋友に逢へることか、斯んな事なら子供の折あんなに妹をいぢめるんぢやなかつた(余は重ねて言ふ子供の時と)などと思ひながら、もう是までと殆んど心で諦らめると、其時打寄せる波が又意外にも砂の上へ投げ歸す。四顧して初めて己に還れば、滄溟宜敗と云ふ爲體で砂の上に尻餅をついて居る。動悸を抑へて海の上を一瞥すると何だ馬鹿々々しい、二尺にも足らぬ處を命が

けで泳いで居たのである。早速着物を脱いだ場所へ飛んで行つて手早く着物を着ると、追はれるやうに宿へ歸つて、そして何喰はぬ顏をしながら、海は好きだと云つたやうに取り濟まして居る。

今度も矢張り毎朝水泳をやると云ふ積りで議論を闘はして居る。ジョージは、爽快な朝ボートの中で眼を覺まして、澄み極つた水にざんぶとやるのは氣持がいゝと言つた。ハリスは又食前の水泳位食慾を進めるものはないと、實驗から割り出して其說を主張した。するとジョージは、若し水泳がハリスに普通以上の食慾を逞うさせるなら自分は斷然水泳には反對だと敦圍いた。

ジョージの言ひ分は、ハリスは元來大飯喰ひなのだ、此男が其上更に喰つた日には、之に應するだけの食糧を積んで河を遡るのは非常な勞力だと云ふのであつた。

僕は併し其爲め假令百斤位の糧食を多く運ぶとしても、ハリスが居れば殘飯の始末などには極く都合がいゝから矢張り泳ぐことにした方が宜からうと言つてジョージを宥めた。するとジョージも僕の調和說に贊成して游泳反對說は撤回した。

タヲルを共有にして水につかる毎に待ち合はせて使用するのは不便だから、此れだけは一人に一つ宛携帶することにした。

ジョージは汚れたら洗濯するから、シャツは一人前二組宛用意して行けば澤山だと言つた。そんなら河で洗濯した經驗があるかと聞いたら、『僕アやりやしないさ、だけど人がやるのは見たことがあるが、洗濯なんぞは實際譯ないものだよ。』と言つた。併し僕とハリスは、ジョージの野郎實際今言つて乃至洗濯の經驗もない僕等が、果して石鹸一つでシャツとズボンをデームスる事が自分自身にもよく解つて居るのか知ら、又地位もなく、名望もなく、

河で洗濯することが出來るか何うか、大いに怪しいものだと思つた。

否僕等は既に此時から、ジョージは何の經驗も無い門外漢で居ながら、其場を胡麻かす爲め心にもない嘘を吐いたのであつたと云ふことを悟らねばならぬ破目に陷つて居た。それは今後の事實に徵すれば解る事ではあるが、我輩は一寸三文小説家の慣手段を借用して、當らず障らず前以て此處に後日の失敗をほのめかして置くのである。

四

ジョージは船が覆つて着換へを要する時の用心に下着と靴足袋を幾らか餘分に用意して行かう、又物を拭くに便利だからハンカチフを少し澤山と、それから此れも爾ういふ場合には是非必要だから編み上げの靴と外にボート用の奴も一足づゝ準備して行かうと言つた。

それから今度は糧食の相談をした。ジョージは先づ朝飯の分から始めろと言つた。(ジョージは實際家である。)そして、

『朝飯を作るには揚げ鍋が眞先だ。(ハリスは揚げ物は不消化だからいかんと言つた。併し僕等は馬鹿は言はぬがよからうとハリスを制して、ジョージは更に語を繼いだ。)それに土瓶、釜、アルコール應用暖爐。』とジョージは此處で一先づ言葉を切つて、

『油は駄目だからね。』とさも勿體らしい顏付をした。僕もハリスも其れは贊成だつた。

ジョージは一度石油焚きのストーブを持つて旅行に行つたさうだが、一度きりで二度と持つて行かなかつたさうである。何故つて旅行中其奴が流れ出して、一週間が間と云ふもの、まるで石油倉にでも入つて居るやうだつたさうな。凡そ世の中に石腦油が溶けたの程始末に了へないものはない。何時だ

つたかボートの舳に積んだ石油が艫の方へ流れ出して、流れた跡は申すに及ばずボート一杯石油の臭にして仕舞つて、其れだけならまだしも其の石油が河一面に浮上つて、空氣も景色も皆石油化して仕舞つた事があつた。其結果今日は石油臭い西風が吹くと、明日は石油臭い東風が吹く。明後日は石油の南風で、明々後日は石油の北風であつた。風が北極の雪から吹くと南洋の沙漠から來るとを問はず、四邊は悉く石油の氛圍氣を以て滿たされた。

お蔭で日出日沒の景色まで臺なしになつて、日の色も月の光も石油曇りとお出でなすつた。

マアローに着くと一刻も早く逃げ出さうと思つて、橋の處でボートを捨て早速町へ飛込んだ。それでも執念くつけ廻つて、歩く町は何の町も石油だらけのやうだつた。お仕舞に墓地へ逃込んだら死骸が石油に浸つて居た。ハイ・スツリートも石油だらけ、人が其中に住つて居るのかと思はれた。仕方がないからバアミンガムの方へ歩いて見たけれども其れでも駄目、其處ら一體石油に浸つて居る。

方々駈けめぐつた末、淋しい野原に出て、吹き洒しの樫の樹の下に立つて大に誓つた。(誓ふと云つても其れまで一週間も續けざまにやつて來たやうな、そんな平凡な誓ではない。)——一生石腦油は假令何んな事があつても決してボートには持込まぬ——と云ふ、深酷な奴で、併し病氣の際は此限にあらずと誓つた。

だから今度は火力は一切アルコール分に仰ぐことゝした。そりやあアルコールだつて、實際香ばしいものぢやない、此れで煮たものはパンでも菓子でも矢張り臭い。併しアルコールだと一時存分にやりさへすれば、石腦油よりも強壯劑だからいゝ。

朝食用として、ジョージは料理に手が掛らんから、鷄卵、燻し肉、それか

ら乾肉、茶、パン、バタ、及びジヤミの類がよからうと言つた。それから晝飯にはビスケット、冷肉、パン、バタ、ジヤミと此れだけ推薦して、チーズだけは止めやうと言つた。然り此奴も石腦油同樣手に了へぬ品物で、船一杯チーズ臭くして仕舞はぬと承知しない奴である。知らぬ間に籠を拔け出して其處いら一杯チーズ臭くして仕舞ふなどは得て有り勝ちな事で、そんな場合には林檎のバイを食はうが、獨逸製の腸詰を平らげやうが、其他苺にせよクリームにせよ、皆チーズの味がある。而も此奴は猛烈だ。

僕の友人で一度リバープールでチーズを二鏇買入れた奴があつた。此れが少し饐えかゝつた奴で、方三哩位は三百馬力位な勢でぷん〳〵惡臭を放つて人をどやし付けやうと云ふ奴だつた。僕は其時丁度リバープールに居たが、友達の野郎少し用事が出來て二三日のところ立つ譯に行かんから、差支がなければ其奴を家まで屆けて置いて呉れないかと云ふ相談だ。早く送つて置かないと腐ると云ふ心配もあつたらしい。僕は大呑み込みで、

『持つて行くとも、』と二つ返事で請合つた。

で立つ前友人の宿へ立寄つて其奴を受取ると直ぐ馬車へ乘込んだ。ところが此馬車馬が又珍無類だ。御者はそれでも正に馬だとは言つて居たが、實に妙な恰好で歩く毎に兩脛が鉢合せをやらうと云ふ、奈々息切れをさせてる、歩いてるのか跪いてるのか解らないやうな奴だつた。僕は馬車に乘込むと先づチーズを棚に上げた。馬は直ぐ百馬力の輪轉機も其處のけと云ふ速力とは反對な速力で徐ろに駈り出した。そしてと或る町角を廻る迄は萬事お葬送の鉦同樣平穩なものだつた。ところが或る町角にさし掛ると、チーズ臭い風がぷん〳〵馬の上へ吹きかけた。すると奴さん一時に覺醒して、ふうつと鼻息を吹いたかと思ふとはや一目散だ。見る〳〵一時間三哩位の速力で以て駈け出した。然るに風は絕えず同じ方向にぴゆう〳〵吹きかけるものだから、奴さ

ん力限りの全速力で、跛者や痛風病みの婆さんなどは見てる間に雲を霞と駈け抜けて、町外れにかゝつた頃は、左様あれで一時間四哩位の速力だつたらうか。

驛では人夫二人に御者まで掛つて漸く引き止めるには引き止めたが、若し其時一人の男が氣を利かして、奴の頭からすつぽり手拭をおつ被せ、其鼻先で反古でも燃やして見せなかつたら、到底引き止める事は六ヶ敷かつたんだ。

切符を受取るとチーズを取卸して大威張りでプラットホームへ出た。すると左右の群集恐れをなして殘らず僕の後ろへに引き下つた。汽車は込んで居たから餘儀なく又馬車へ乘つた。其れにはもう七人の先客があつた。中に一人意地の悪い老爺が居て入れないと言つたけれど、僕は無理に割り込んでやつた。そしてチーズを棚へ上げると一つお愛想笑ひをして、今日はお天氣がよろしいなあつてな事を言つた。二三分經つと傍の老爺がもち〳〵やり出し

た、そして、

『何うも窮屈でおまんなア、』と言ふ、すると傍の先生、

『いや全くやりきれません、』と相槌を打つた。

それから二人してくん〳〵鼻を鳴らし始めたが、三度目に臭い奴をうんと吸込んで魂消居つた。そして立つたかと見てる間に物も言はず出て行つた。

今度はよく肥つた妻君が立ち上つて、身分もある、而も亭主持ちの女をこんな目に逢はせるのはけしからんと眩いた。そして信玄袋と外に包を八つ許り提げて出て行つた。殘つた四人は暫時默つて居たが、今まで豪さうな顏付をして片隅に腰掛けて居た、其服裝と容貌から察すると何だか斯う請負師位に思はれる男が、とう〳〵、何だか赤ん坊の腐つたやうな臭がすると言ひ出した。すると外の三人の奴は爭うて馬車を出たが、其どさくさまぎれに少し怪我をした者もあつたやうだ。

僕は其時傍に居た色の黒い男を振り返つて、何うやら二人で馬車が專領さ
れさうだと言つたら、先生にやりと笑つて、人は下らぬ事に得て大騒をする
ものぢやと言つた。併しお仕舞には此先生まで何だか鬱ぎ込んで來た。僕は
クローに着くと一緒に飲みに行かうと言つて先生を誘つた。すると先生も賛
成して、僕等はとある料理屋へ上つた。そして大きな聲を出して喚いたり、
足をばたばたやつたり、續けざまに十五分間も蝙蝠傘を振つたりしたら、や
つと若い女中が一人出て來て何を差上げましやうと言つた。
『君何がいゝですか。』と今の先生を振向くと、先生僕には答へず、
『姉さん、私は一圓廿錢ばかりのブランデーを一杯貰ひ度いがねえ。おいし
い奴だよ。』と乙にお出でなすつた。
女中が持つて來た奴をぐつと引つかけると、先生直にすた〳〵出て往つて
他の車に乘り代へた。僕はやり方が下卑てると思つた。

クローから先も勿論汽車は込んで居たけれど、僕だけは特に一車室を專領
することが出來た。停車場へ着くと何時も此方が空いてるものだから誰も我
先にと押しかけて來る。そして、
『マリアさん、此室がいゝよ、大變すいてるから。』
『さうねえ、ぢや其室にしましやうね。』つてなことを言つて重いカバンを引
摺り乍ら押しかける。そして入口の處などではまるで喧嘩腰だ。だが眞先の
奴が戸を明けて昇降口に足をかけたかと思ふと、よろ〳〵と後によろめいて
後の奴の手を捕へる。誰も彼も一度は必ず入口の側まで來てくん〳〵やつて
見るが、直ぐ轉げるやうに外の車室へ駈け込んで行く。中には增税を拂つて
一等へ乘換へる奴もある。
ユーストンで下りて友人の家へチーズを届けた。妻君客間へ出ると一寸鼻
を動かして、

着

『何ですの、其れ？。仰つしやつて下さいな。』

『チーズですよ。リバープールでお預りしたんですがね、家まで届けて呉れと云ふお話でした。』

そして僕は唯だ預つて來ただけでチーズとは別に何も關係があるんぢやないと斷つたら、妻君は何も疑ふ譯ではないが、併し主人が歸つたら何故こんな物を頼んで寄越したのか尋ねて見ましやうと駄目を押した。

友達は豫定よりも長く滯在した。其後二三日經つとまだ歸らないと云つて妻君が訪ねて來た。何を言ふかと思つたら、

『夫はチーズの事に就いては、外に何とも申しませんでしたか。』と斯うだ。

僕は唯だ乾燥しない處に置いて、成る可く手を觸れないやうにして置けと云ふ事だつたと答へると、妻君、

『誰も手出しなんかしは致しませんがね、夫ぢや、あの、あれを嗅いで見たんで御座いましやうか。』と聞く。

僕は無論トム君は嗅いで見たんだらうと思つて居た。だからお宅ぢやア大變大事にして居らつしやるやうでしたと答へた。すると、

『若し茲で私が十圓も日傭賃を出しまして、あれを何處かへ埋めて貰ひましたら、夫は怒るで御座いましやうか。』と云ふお尋ねだ。だから僕は、

『そんな事なすつたらトム君は一生笑顏はしますまい。』と言つてやつた。すると、妻君其時不圖何か思ひ出したやうな顏付をしたと思つたら、

『此方に暫時預つて頂く譯には參りますまいか、直ぐ誰かに屆けさせましやうですが。』とお出でなすつた。そこで、

『奥さん、私はチーズの臭は寧ろ好きな方ですから差支ありませんがね、否え、好き不好きの問題はさて置き、先日あれをお屆けした時の事なんか今に折々思出しては愉快な祭日だつたと思つてる位ですから、私一人だと一向差

支ないですが、併し世の中の事はさう〳〵自分勝手にばかりは行かないものでしてなア、たまには又人の事も考へてやらなきやなりませんよ。なに外でもありませんが、私今一人同居人があるんです。未亡人ですがね。どうやら孤兒で成長つたらしいんです。其爲めか、少し常人と異つた點がありましてね。何うもその人にやられたと云ふやうな事を大變氣にする方なんです。だから若し私があのチーズをお預りしたら、先生屹度氣を惡くするだらうと思ふんですがね。するとそれ私にしたところで、人から未亡人、而も人一倍不運な人を虐待したと言はれちやア少し面白くないんでしてね。』と巧く言ひ拔けてやつた。すると妻君そろ〳〵身繕ひをして、

『左樣でございますか、ではあのチーズが無くなりますまで私子供を連れて何處か宿屋がゝりでもする事に致しましやう。私何うしてもあれと同居は出來ませんから。』と言つて出て行つた。

妻君は其言葉通り留守を下女に任せて家を出て仕舞つた。其下女と云ふのは『お前此臭が堪へられるか。』と聞かれたら、『何んな臭で御座いますか。』と言つたさうで、『此れだ』と言つてチーズを其鼻へ突き付けると、一寸西瓜の腐つたやうな臭がすると言つたさうである。でそんなら此女に限つて惡臭の爲め健康を害するやうな事もあるまいからと云ふので、留守居を申付かつたと云ふ事であつた。

其結果妻君達のホテルの仕拂が百五十圓餘になつた。友人が歸つて來て、一切の勘定をして見たらチーズ一ポンドの價が三圓三十錢餘に相當して居つた。友人はチーズは大變好きだつたんだけれど、これでは到底何うすることも出來ないと云ふので、とう〳〵捨てゝ仕舞ふ事に決心した。初め運河に捨てさせたら船頭どもが八ケ間敷言ふので、一旦捨てたものを大騷ぎして捜索させた。船頭どもは臭氣が甚くつて氣が遠くなると言つたさうだ。今度は暗

夜に乘じて埋葬地へ捨てさせたら檢屍官が發見して又一騷動持上つた。

其時の友人の言ひ草が面白い、『此れは死人を甦ます爲めの計略だ。』つてさ。

百計盡きて今度は海岸の市街地へ埋めて漸く厄拂ひをしたさうだが、此地は其後有名になつて、觀光の客引きも切らず、集まる者は皆口を揃へて、此地の空氣が斯くまで健康に適して居やうとは夢にも知らなかつたと激賞し、無二の健康地として爾來呼吸器病患者や、肺病患者の蝟集する處となつた。

僕は實際チーズは好きなんだけれど、斯んな實例もあるんだから、一切チーズを携帯せぬと云ふジョージの說に贊成した。

それからジョージは又、『茶は廢めにしやうぢやないか、(此時ハリスの顏付が俄かに變つた。)そして其代り七時頃に、晚餐と茶とデインナーを一緒くたにしたやうな御馳走をやる事にしやう。』と言つた。

ハリスの顏付は又急に良くなつて來た。ジョージは肉、パイ、乾肉、果物及び靑物を推薦した。そして飮料としては淸水を加へて作つたハリスの所謂濃厚飮料と、世人がレモン水と稱して居る奴と、茶と、水と、尙ほ又ジョージの說に從つて、水にはまつた時の用心にウイスキーを一瓶携へることにした。

僕の眼から見るとジョージは餘り水には縁遠潤に行く場合に斯んな考は左程必要でない。

併しウイスキーを持つて行く事にしたのは何よりだつた。

尤も酒と麥酒は見合はせる事にした。此れは精神を鈍らせる奴だから河を遡る場合には禁物である。晚方散步に出掛けて女學生でも冷かすのならざ知らず、太陽が直射する下で勞働しやうと云ふ場合には此奴は餘り感心せぬ。

其晚歸る前に目錄は出來上つたが、可なり長いものになつた。翌日は金曜

だつた、夕方僕等はそれ〳〵品物を持ち寄つて行李に詰めた。先づグラッドストーン形のカバンに着類を入れて、食料と料理道具は二つの籠に入れる事にした。テーブルを窓の側に片寄せて、室の中に品物を積み重ねたまゝ暫時其れを打守つて居たが、僕が先づ詰めて見やうと言ひ出した。

荷造りは元來僕の自慢である。僕は人より豪いと自信して居る事はまだ澤山あるが、（否、有り過ぎて自分ながら寧ろ驚いて居る位だが、）殊に荷造りなどは自慢の一つである。僕はハリスとジョージにも繰返し〳〵其事を言ひ聞かせて、それだから一切僕にやらした方が得策だと說諭したら、兩人とも少し曰く附きの早速で同意した。ジョージはパイプを喞へて椅子の上に踏みはだかり、ハリスは机に足をもたせかけて、シガーに火を點けた。

併し僕は斯んな態を見せ附けて貰ふ積りぢやなかつたんだ。僕の積りは唯だ奴等の傍に居て、『君何をやつてるんだ。一寸僕に貸して見ろ、馬鹿だな君

は。』つてな事を言つて奴等を小突き廻しながら、實際の仕事は奴等にやらせたかつたんだ。——即ち荷造の方法だけを奴等に教へてやりたかつたんだ。

だから此時二人のやり口がうんと僕の癪に障つた。僕は自分がせつせと働いて居るのに、懷手なんかで傍から凝乎と見てる奴位面憎いものはない。

僕は以前能く此手で僕を怒らした奴と一緒に居たことがある。奴、僕が仕事をしてると何時も傍に來て見物を始める。そして一時間でも二時間でも傍に坐つたまゝじろ〳〵僕の手の動き方を見て居る。そして其言ふ事がいゝや、僕が齷齪して働つてるのを見てると大いに自分の爲めになる、凝乎と見てるばかりでも人生は義務と勞働で固まつた眞劍な勝負場で、決して欠伸しながらのらくら暮らされる處ぢやないと思はせられるなぞと吐かす。それから爾う眞面目に仕事をしてる奴を見たのは君が初めてだが、君に逢ふ前は僕一體何んな考へで居たらうなんぞつて言やがる。

僕には併し此男の眞似は出來ぬ、人が働いてるのを坐つて見物してるなんか僕には何うしても出來ない質だ。僕だと早速立ち上つてポケットに兩手を突込んで、あゝしろ、斯うしろと指圖して歩き度くなる。これは僕の精力主義の致す所で如何ともすることが出來ぬ。

併し僕は此際一言も發はなかつた。そして早速荷造りに取掛つた。ところが此奴は僕が思つて居たより手間取つた。だがとう〳〵カバン一杯詰込んで其上に跨り、悠然として紐を括つた。其處へハリスが傍から、

『靴は入れないのか。』と突込んだ。

傍を見たら果して入れ忘れて居る。ハリスは何處までもハリスだ。此男なら屹度僕がカバンを閉ぢて紐を掛けて仕舞ふまではしらばくれて居るんだ。ジョージは劈けるやうな大きな口を開いて白痴のやうな笑ひ方をした。僕は奴等のやり方が癪でならなかつた。

カバンを開けて靴を入れた。そして再び其れを閉ぢやうとしてはつと思つた。齒磨楊枝は入れたかと云ふ疑問がひら〳〵と閃めいた。何うだかはつきりしないが齒磨楊枝を入れた覺えは更にない。

旅行毎に僕を手古擦らせて、果は世の中を悲觀させるのは何時も此奴である。夜になると楊枝をカバンに入れ忘れた夢を見る。冷汗をかいてはね起きる。床から這ひ出して搜して見る。朝になると其奴をまた、使ひもせぬ前から詰込んで仕舞ふ。餘儀なく又一度詰めた奴を取り出す。カバンを詰め直す時は最後までカバンに殘して居るが、一切出して詰め直して今度其れを閉める時は又すつかり忘れて居る。いよ〳〵汽車が出る段になつて思ひ付いて、二階へ飛んで行つてハンケチへ包んだまゝ停車場へ駈け付ける。

僕は忌々しさに齒を噛ひしばりながらカバンの品物を殘らず取出して見たが、楊枝だけは何うしても見つからん。創世以前まだ混沌が此世を支配して

居た頃は斯んな有様であつたらうかと思はれる位まで、品物は有りつたけ掻き廻して見た。勿論其間にハリスとジョージのは十八回も目についた。併し僕のばかりは見つからぬ。今度は又カバンから出した品物を、一つ〳〵高く取上げては振つて見た。そしたら靴の中からぽたりと出て來た。僕は又も一度詰め直した。

詰めて仕舞つたら今度はジョージが石鹸は何うしたと尋ねた。僕は石鹸が入つて居やうが居るまいが更に痛痒を感じないと言つてやつた。そして口金を掛けて紐でからげたが、ふと氣が付くと烟草入を詰め込んでしまつて居たので、又も一度開けねばならなかつた。漸く十時五分に悉皆詰込んで仕舞つた。殘つたものは二つの籠である。ハリスは出立ももう十二時間以内に迫つて居るから、籠は自分とジョージに任せて貰ひ度いと言つた。僕は早速贊成して座に復ると二人はぼつ〳〵始めた。

二人とも荷造りは斯んなにやるものだよと言はんばかりの顏をして愉快げに取り掛つた。僕は何も言はずに默つて見物して居た。ジョージが若し絞め殺されたら、世界中一番の荷造り下手は確かにハリスである。私は彼が積み込む皿や、コップや、釜や、德利や、壺や、バイや、ストーブや、菓子や、トマトーやを見ながら今に一騷動持上るわいと思つて居た。

果して持上つた。先づコップを割つた。此れを切つかけに奴等は段々始めた。而も御覽よ龕相はこんな具合にやるものだと言はんばかりの面付をしてやつて見せた。

ハリスはトマトーの上に苺のジャミを載つけて其れをぐちや〳〵に壓し潰した。そして潰れた奴を匙で掬ひ取つた。

此度はジョージの番だ。奴バタに足を踏み込んだ。僕は無言のまゝ其傍に行つて、机の角に跨がつて傍觀した。此れが喋るのより奴等には却つて癪に

障つた。兩人とも氣狂ひのやうになつて品物に乘つかつたり、後ろに投げやつて其れを見失つたり、籠の底の方にバイを詰めて其上に重い物を載つけて其れを壓潰したりした。

何も彼も食鹽だらけ、殊に滑稽なのはバタである。僕はまだ十錢かそこらのバタを捕まへてあんな大騷ぎをやつた人間を見た事がない。ジョージは漸くスリッパから其れを取り離して、今度は土瓶の中へ入れやうとしたが、入れやうとする分は入らず、さうかと云つて入つた奴は容易に取り出せず、二人で散々手古摺つた後、漸く悉皆掻き取つて仕舞つて椅子の上に載せた。然るにハリスがうつかり其上に腰掛けたものだから、べつたり尻に喰つ附いた。暫くすると、二人はバタが無くなつたと言つて部屋中捜し歩いた。

『確かに此處に置いたんだが。』とジョージは何も載つて居ない椅子を見る。

二人はバタを捜す爲め幾度も室内を歩き廻る。そして室の眞ん中でばつた

り兩方から鉢合せをしては、又廻れ右前をして捜し廻る。

『斯んな不思議な事は始めてだ。』とジョージが言ふ。

『可笑しいねえ。』とハリスが應じる。

今度はジョージがハリスの後へ廻つた。そして尻に喰つ附いて居るのを發見した。

『何だ馬鹿な、君の尻に喰つ附いて居たんだ。』と怒りつける。

『何處だ、〳〵。』と言つてハリスがくる〳〵廻る。

『靜として居ないか、おい。』とジョージがハリスの尻へ突貫する。

漸く取り離して今度は釜の中に入れて籠に詰めた。

モントモレンシーも荷造りの騷ぎに加はつて居た。此奴は人の邪魔をして怒鳴られるのを畢生の希望として居るやうだ。格別用もない處へ行つてごろりと寐そべつて、そして手當り次第に何かでぴしやりと邪魔をして人を怒らせて、

やられさへすれば、奴さん今日は光陰を徒費しなかつた位に考へて居る。

誰かに躓かせて一時間も立て續けに毒づかすれば、奴さんそれで大願成就。斯くの如き成功を得た時の奴の得意や當る可からずだ。

奴めのつそりやつて來ては二人が詰めて居る物の上に平氣で蹲る。ハリスかジョージかゝ何か取らうと思つてうつかり手を出すと、冷たい濕つた鼻先をぬつと出して摑ませる。而も其れを自分の天職だと心得て實行して居る。それからジャミの中へ足を踏み込む。匙を滅茶〳〵にする。レモンを鼠と間違へたやうな顏をして籠の中へ飛込む。そしてハリスが揚げ鍋を出してしたゝかなぐり付ける前に、ちやんとレモンを三つ程噛み潰して居る。

ハリスは僕が喉しかけるんだと言つて大變怒つた。だが僕は少しも其んな事は爲やしない。こんな奴は煽てなくたつて大丈夫だ。斯んな眞似をやるのは奴が持つて生れた因果の致すところだ。

荷造りは十二時十五分に了つた。ハリスは今詰めた大籠に跨つて壞れた物が無ければ宜いがと言つた。ジョージは壞れた物は壞れたものだから仕方がないと言つて先づ安心したと云ふやうな面付をした。そしてもう寢るばかりだと附け加へた。さうだ、其時はもう皆寢るばかりになつて居た。其晩はハリスも泊ることになつて居たから、皆連立つて二階へ上つた。

僕等は夜具をまくつた。僕は其晩ハリスと同衾することとなつて居た。ハリスが、

『ゼローム君、君內側がいゝか、外側がいゝと言つたら、ハリスは其れは妙だと言つた。ジョージは其時傍から、『何時に起さうか。』と訊くから、僕は、內側が『七時だ。』と答へた。併し僕は手紙を二三本書き度いと思つて居たから、『七時ぢやない、六時だよ。』と言つた。

ハリスと僕は其爲め喧嘩をした。そして其中を取つて六時半にした。

『六時半だよ、ジョージ君。』と言つた時、ジョージはもう返答もしなかつた。見たら疾うに眠つて居た。だからジョージが朝起きしなに大概足を踏み込みさうな位置を見計つて、バケツを裝置して置いて、僕はハリスと一緒に床に入つた。

五

翌朝ポペット婆さんが僕等を起して呉れた。

『貴君もう彼是九時で御座いますよ。』

『え、九時ですつて？』と言ひながら僕は驚いて飛び起きた。

『えゝ爾うですよ、寐過しなすつたんでしやう。』と鍵の穴から室を覗きながら外で返答する。

『九時だとさ九時だとさ。』と言つてハリスを起すと、先生、

『え、九時だつて。君六時に起きるのぢやなかつたかい。』と訊く。

『さうだとも、何故早く起して呉れなかつたんだ。』と詰ると、

『だつて、君が起さないのに起されるものか。この鹽梅ぢや十二時になつて乘込めやしないよ。だがそれでも兎に角起きたのは感心だ。』と言ふ。

『ふむ、可笑しくもない。僕が若し起きなかつた日には、二週間は大丈夫寢過してらあ。』と言つてやつた。

五分間もこんな惡口を言ひ合つてると、突然雷のやうなジョージの鼾聲に遮られた。僕は起されて以來此時初めて彼奴の存在を認めた。昨夜は何時に僕等を起してやらうなんてつて勝手な熱を吹いて居た癖に、野郎今膝頭をピラミッド狀に聳やかして、然も大口を開いて寐て居る。

何故だか知らんが僕は自分が起きてるのに、傍でぐう〳〵寐てる奴を見る

と矢鱈無性に癪に障る。一度失へば取返しのつかぬ貴重な光陰を、牛豚のやうな睡眠の裡に抛つて居る圖などは見たばかりでもぞつとする。

ジョージは正にこれだ。一秒一刻と雖も之を無駄にすれば又其れだけの責を負はねばならぬ貴重な光陰を此恐る可き惰眠の裡に消して、野郎而も泰然と寝て居る。ジョージたる者此竹頭木片の如き忘却に身を委ねて大の字形になつて居るより、當に須らく一刻も早く床を出て、犬をじやらすとか、下女にからかふとかしながら、手早く卵か牛乳を詰め込んで、腹を作る算段をしたら宜さゝうなものである。

實に勿體ない話だ。ハリスも僕も同時に同じ恐怖に囚へられた。そして奴を救つてやらうと決心した。さうだ、二人とも此高尚な決心があればこそ、申合せたやうに喧嘩することも何も忘れて仕舞つた。僕は直に寝臺から伸り出してジョージの蒲團をめくつた。ハリスはスリッパで、ぴしやりと參つた。

僕は又奴の耳に口を當てがつて絶叫した。

『ム、、、、騒々しい、何うしたんだ。』と言つて眼を開けた。ハリスは大聲で、

『何時まで寝てるんだい、馬鹿だなア貴樣は。もう十五分で十時だよ。』と喚いた。するとジョージは、

『十時だ！』と言ひさま跳ね起きて寝臺から飛び出したが、ぐわらんとバケツに足を踏み込んだ。そして、

『誰だい、こんな器を此處に置いたなア。』と怒鳴つた。

僕等は『見付けないのが馬鹿だよ。』と言つてやつた。

着換へを終つて扨と云ふ段になつて、楊枝も、櫛も、ブラシも一緒くたにカバンに詰めたのを思ひ出した。（楊枝は僕の生命取りだとは千萬承知の上、）餘儀なく下へ走つて行つても一度カバンを引つ〳〵りかへさねばならなかつた。

一混雑相済んだ後、ジョージは剃道具が欲しいと言ひ出した。僕等は彼、乃至彼の如き者に向つて更に又カバンを開けるのは馬鹿〳〵しいから、今朝だけは剃らずに我慢しろと言つたところ、

『馬鹿言つちや困る、これで町へ出られるかい。』と言つた。

道理だ髯蓬々でロンドンへ乗込むのはちと亂暴だ、併し誰だつて人の迷惑なんぞに關係して居る餘裕があるものか、ハリスが平生言つてることだが、穿鑿だてすれば迷惑してる人間はロンドン中に溢れる程居る。

揃つて下に飯食ひに降りて行つた。モントモレンシーは自分を見送らせる積りで二匹の仲間を連れて來て、そして戸の側で喧嘩をして時を潰して居た。然るに何時まで經つても喧嘩を止めんから、僕は其中に蝙蝠傘を一本投入れて、然る後膳に向つた。ハリスは、

『朝飯を詰込むのが何より急務だ。』と言つて、見てる間に刻み肉を二皿も平

らげた。そして肉なら何時まで置いても大丈夫だけれど、こんな物は早く平らげんと直ぐ冷めて仕舞ふから、と言つた。

ジョージは新聞を擴げて、端艇旅行遭難記事と、天氣豫報とを朗讀した。

天氣豫報に曰く、「雨、寒氣強し、後晴れ。」（これが普通以上果して何れだけ惡い事を豫報してるのかは解らないけれど。）又曰く、「地方により時々雷雨あり、東風、中部諸州一般に氣壓低し、（殊にロンドン及び海峽地方）晴雨計次第に下降しつゝあり。」と。

人間を苦しめて之を馬鹿扱ひにする者の中でも、天氣豫報は確かに其最も甚しいものゝ一つである。と僕は平生さう信じて居る。

天氣豫報は多くの場合に於て、昨日の天氣か、一昨日の天氣を極く正確に豫報してるか、さもなければ明日の天氣を全然反對に豫報するものである。

僕は地方新聞の天氣豫報を過信したばかりに、晩秋の日曜を全く臺なしに

して仕舞つた事を今に能く記憶して居る。「驟雨、雷鳴、暴風の兆あり、」と云ふ豫報が或る日曜の新聞に現はれた時の事であつた。皆遠足は見合はして家に閉ぢ籠つて、雨が來るのを待つて居た。

すると四輪馬車や、遊山馬車に乘つた奴等が、これより愉快な事はないと云つたやうな顏付をして、幾組も幾組も門先を通る。日はかん〳〵照り付けて雲も見えぬ日であつた。

僕等は窓から顏を出して往來を眺めては、

『やれ〳〵氣の毒なものだ、今に濡鼠になつて歸るんだらう。』と人の頭痛を氣に病んで居た。

併し此奴等どもが今に濡鼠のやうになつて歸つて來るかと思ふと、何だか擽ぐつたいやうな一種得も言はれぬ氣持がした。僕等は室に歸つて火を掻きおこして書物を取り出したり、海草や貝殼の標本を並べて見たりした。十

二時頃になると日光は一杯に室に映して來て、暑く〳〵て堪らぬやうになつた。斯うなると今度は果して何時になつたら、雷鳴暴風を起して驟雨俄かに殺到するのかと、其れが少しづゝ氣になり出した。

『今に大騷ぎで歸つて來るよ、さぞ濡れる事だらう。窓から其れを見物して るのも滿更面白くないこともあるまい。』などと言つて話し合つて居た。

一時頃になると宿の妻君がいそ〳〵二階へ上つて來て、斯んな天氣に何故出掛けないのかと尋ねた。

『厭なことだよ、頭から濡れるのは氣が利かないからね。』と一角先見の明ありげに、薄笑ひなどして見せた。

ところがもうそろ〳〵夕方になつても更に降りさうな氣配が見えん。併し出掛けた連中が歸りかけて、其處いら中雨宿りする場所もないと云ふやうな處へさしかゝつたら、其時一陣の風俄かに吹き起り、電光ピカ〳〵、驟雨颯

と盆を傾け來つて、誰も彼も前古無比に濡れることだらうと其れを樂しみにして自ら慰めて居た。然るに奇なる哉、怪なる哉、其日は遂に一滴の雨も落ちなかつた。夕燒け小燒けで立派に暮れて、夜は降るやうに星が出た。

其翌日の豫報は「暖、快晴、暑さ強し。」と云ふんだつた。僕等は輕裝して出掛けた。するとまだ一時間も經たないのに大降りになつた。おまけに寒い風がビユウ〳〵加はつて、其日は終日降り詰め吹き通し、歸つた時はお蔭で身體一杯風邪とリユーマチスだらけになつて、這々の體で床に潜り込んだ。

天氣ばかりは僕實際持て餘して居る。僕には第一何うしても日和見が出來ない。晴雨計が當てにならぬこと亦全く新聞の天氣豫報と同一だ。」

「僕が此春泊つて居たオックスフヨードの宿屋に、晴雨計が一つ懸けてあつた。僕が行つた時は快晴の處を指して居た。其れにも拘らず外は濕ぐやうな雨で、而も降り詰めに降つて居た。不思議でならなかつたので、ばたりと掌で喰はせて見たら、針がひよいと飛上つて、炎天の處へ行つてぴたりと止まつた。ボーイは通りすがりに一寸見て、其れは明日の豫報だらうと言つた。僕は『ぢやない先週の豫報をやつてるんだ』と言つたら、ボーイは矢張りさうぢやないと主張した。」

翌朝も又一寸叩いて見た。そしたら針はづん〳〵上に上るばかり、雨は益々降りしきつた。水曜に又も一度叩いて見たら、針は「快晴、炎天、酷暑」とぐる〳〵廻つて、お仕舞にはがちりと引つかゝつたきり、何うしても動かなくなつた。針は出來るだけ努力して見るらしかつたけれども、何うしても其れからは動かなかつた。其れ以上動けば器械が破損するやうな造り方になつて居たものらしい。針は併し何うやう廻り度くつて堪らなさゝうだつた。然り大に廻つて、「旱魃、洪水、飢饉、日射病、旋風、」何でも御座れ豫言して見たいらしかつた。併し何か邪魔をする物があつて何うしても爾うは針を廻

らせぬ。其爲め此晴雨計は十年一日の如く、平凡單調な快晴、炎天ぐらゐの處で滿足せねばならぬものらしかつた。

其時雨は幾日も續のやうに降つて河が氾濫した爲め、下手の町は皆水に浸つた。

炎天で行き留つた晴雨計を見て、給仕は此雨が霽つたら今後暫くは晴天續きだと云ふ豫言だらうと言つて、上の方に印刷してある御符を讀んで聞かせた。其文句は、

「久しき豫言は、久しく支ふ。咄嗟の豫言は、瞬間のみ。」

と記いてあつた。

併し其夏は結局一日も快晴の日と云ふものは無かつた。晴雨計は多分來年の豫報をして居たんだらう。

又新式な奴で長い眞直な晴雨計がある。僕は更に此奴の構造が腑に落ちぬ。

長管の片方は昨日の午前十時、又一方には今日の午前十時の目盛が附いて居る。此れで見ると十時以前の事は解らないらしい。多少風も加はつて降るか晴れるかすると、此晴雨計は又其れに從つて昇降する。そして上の方が北風で、下の方が東風と斯うなつてるんだ。此處で Ev と云ふのは勿論東風の意味なんで、有名な Ev. 寺院の事ぢやないんだ。だが此奴は前のとは違つて叩いて見たからつて何處も指しはしない。だから此奴で天氣を知るには先づ水準を極めて、華氏の溫度に換算してから掛らなくちやならない。併しさうしたからつて到底正確に解りやしないんだ。

元來天氣豫報と云ふ奴は實際考へものだ。誰が一體そんなものを知り度いんだらう。天氣は惡くなり度ければ勝手に惡くなるんだから、何も前から其れを知つて苦に病んで居なくたつて澤山だ。

僕等は何だか今に一雨やつて來さうな、而も降つては困ると云ふやうな朝

大呑込みで空を見上げて、

『なに、旦那大丈夫ですせ、今に晴れちまひまさあ。』なんつてやらかす老爺が大好きだ。

僕等は左様ならと言つて老爺と別れる時まで、

『老人だけに流石は呑込んだものだ。』と頼まれもせぬ御愛想まで言つて行く。

そして其豫言が全く外れて其日は終日土砂降りに降つたからつて其老爺が憎いなどとはちつとも思はぬ。却つて、

『爺さんだつて一生懸命のところを言つて見たんだらうから。』と割引をして考へてやる。

此れに反して天氣が悪いと言ふ奴は癪に障る。先づ通りすがりに、

『何うだらう、大丈夫だらうなア。』と訊くと頭を振つて、

『何だか當てになりませんよ、今日は何うやら一降り來さうですね。』とやられると、

『何だ、老耄の癖に何が解るものか。』と口の内でぶつくさ言ふ。そして豫言通り果して降りでもしやうものなら業を沸やして歸つて來る。そして此雨は何か彼奴と關係があるのぢやなからうかなどと考へる。

僕等が出發した朝は、兎に角陽氣で爽快だつた。だから、「曲線狀を描いて南歐を襲ひつゝある氣壓極めて悲觀的にして、晴雨計益々降り、氣壓愈々加はりつゝあり。」と云ふジョージの豫報朗讀も左程僕等を失望せしむるに足らなかつた。ジョージは此鹽梅ぢや僕等の元氣を沮喪せしめるどころか、自分の豫報朗讀は徒らに時間を空費しつゝあるに過ぎぬと見て取つたものだから、僕が吹かさうと思つて折角巻いて居た煙草を横合から拐り取つて、風を喰つて逃げ出した。

其れから僕はパリスとテーブルに殘つた二三品の始末をして、造つた荷物を戸口に持出して、其處で馬車が來るのを待つて居た。

荷物は一緒に纏めて見たら大分嵩張つて居た。列擧して見ればグラッドストーン形の旅行カバン、提鞄、籠二つ、風呂敷包一個、外套及び雨合羽合せて數枚、蝙蝠傘數本、餘り大きくつて外に入れ物がないから、特別に一つ袋入りにした大瓜一個、日本製傘一本、及び此奴は他の品と形體が異つて居てカバンに入れにくいからと云つて、パリスが包紙にくるんだ揚げ鍋一つ、以上合せて十餘點、並べて見ると大分嵩ばつてるんで、何故だか知らんが僕等も少しはきまりか惡くなつて來た。待てども〳〵馬車は一臺も通らない。反對に町の子供が大勢集まつて來て、さも珍らしさうに我輩等二人の立列んだのを見守つて居る。

先づ眞先に駈付けたのがビグズ屋の小僧だ。（ビグズ屋と云ふのは此處らの

青物屋であるが、此小僧はこれでも十九世紀文明の産物にかゝる、手に丁へない御用聞きで、子供等を驅り集める事に機敏で、此方面には非常な辣腕を示して居る。だから若し近隣に子供に似合はぬ獰猛な事件が發生した場合には、大概奴の仕業ぢやと判定して差支ない。日外コーラム街で人殺しがあつた時も、町内では皆ビグズ屋の小僧が怪しいと睨んで居た。で丁度其翌日十九番邸へ御用聞きに行つて、其處で手痛く詰問された場合に、（其時は何でも廿一番地の者も來合せて、一緒に吟味したさうであるが、）若し當日被告不在と云ふ證據が擧らなかつたら、奴さん助からない所だつたさうな。僕は其頃まだ此小僧には面識がなかつたから實際何うだつたか知らんが、併し其後に於ける彼の行動から考へると、此被告不在と云ふ證明は餘り重要視する譯には行かなくなる。

先述の通りビグズ屋の小僧が最初に彼方の角を曲つて此方へやつて來た。

角を曲つた時には何やら焦り切つて居たが、ハリス、僕、モントモレンシー、及び他の品物が眼に付くと、一息ついて扱つく〳〵と此方を打守つた。僕はハリスと二人で彼奴を睨め付けてやつた。氣の弱い子供なら大概これで辟易するんだが、此奴等はなか〳〵そんな神經過敏なのぢやない。一間餘り向ふの處へ來てぴたり立ち止つて、藁しべを噛りながら、鈍栗眼で此方を睨み返した。野郎爾うして事件の眞相を觀破する積りなんだ。

少時經つと雜貨屋の小僧が町の向側を通つた。ビグズ屋の先生早速これを呼び止めて、

『おい四十二番地は引越しだぜ。』と言つた。

雜貨屋小僧、其奴は面白いと云ふやうな顏をして、直に駈けて來て、ビグズ屋の野郎と肩を並べて佇立した。其の次に來たのは靴屋の小僧、次に現はれたのがブルーポスト商店の空鑵拾集員、敵は追々多勢となつた。

靴屋の小僧が先づ口を開いて、

『此先生達あ一體何處へ飢ゑに行くんかい。』と吐かすと、

ブルーポスト商店員言下に之に應じて曰く、

『太西洋をボートで乘り切るんなら、もう一品か二品も持つて行つたら宜かないかい。』

するとビグズ屋後れ馳せに、

『太西洋ぢやないよ、スタンレーの探檢に行くんだよ。』

斯んな名說が出る頃には、もう僕等の面前には小群集が形造られて居た。而も子供ばかりではなくなつた。そして口々に何事だらうと私語して居た。若手の方で群集の中でも少し目立つ連中は、僕等を婚禮の一行だと云つて、ハリスを花婿に見立てゝ居た。又少し年寄株の方では僕等を葬式に行くのだと思つて、僕を死人の兄弟に見立てゝ居た。

漸くの事で空馬車が一臺やつて來た。(此處いらは平生馬車に用がない時だと、一分間大概三臺位の割合でうろついて人通りの邪魔をする處である。)僕等は早速其れに荷物を運び入れて乘り込み、群集の歡聲に送られて出立した。

何處までも隨行しやうと誓つたモントモレンシーの友達は一目散に馬車に尾し、ビグズ屋の小僧は武運強かれと、僕等の後から人參を投げ付けた。

十一時前にウヲータールーに着いて、十一時五分發の汽車は何處から出るかと尋ねたら誰も知らなかつた。此れは何時もさうであるが、ウヲータールーでは何處から汽車が出て、今出る汽車が何處へ行くのか、其他其れに關係した事を知つてる者は一人もない。荷物を請取つた人足は第二號プラットホームから出ると言つてたが、もう一人の人足と押問答して居た奴は、二號ちやない一號プラットホームからだと云ふことだつたと言つた。驛長殿は又之に反して、地方線から出ると云ふ意見で在らせられた。

早く埒を明けやうと思つて、二階へ行つて運送係に訊ねて見たら、つい今し方第三號から出ると言つて居た男があつたと言つた。今度は第三號の方へ廻つて訊いて見ると、係りの奴が、サウサンプトンの急行か、ウインヅールの廻歸線でなけりや此處から出るのはないと言つた。そして何故キングストン行が此處から出ないか、其理由ははつきりせぬが、併し此處から出るキングストン行はないと斷言した。

人足の野郎、今度は高架線の方に違ひない、それなら自分は其列車もよく知つてると言ひ出した。そこで僕等は又高架線の方のプラットホームへ行つた。そして機關手に會つてお前はキングストンへ行くのかと訊いて見たら、確かに斷言することは出來ないが多分さうだらう、併し果して自分が十一時五分發のキングストン行になるか何うか、其處の處はまだはつきりしない、兎に角其時になつて見れば直ぐ解ることだと言つた。僕は密と一圓許り奴に

握らせて、十一時五分發のキングストン行になつて貰ひ度いと言つた。そして、

『君が誰で、又君が何處へ行かうと誰もそんな事を知つてる者はありやしないよ、君は道は委しいんだから、そつと汽車を出してキングストンへ行きさへすりやいゝぢやないか。』と言つたら、

『そらアさうですがね、併しもうキングストン行に決つてる者がありましやうから、』と一寸困るやうな顏をしたが、又言葉を繼いで、

『だがそれぢや參りましやう、もう五十錢ばかり奮發して下さい。』と言ふ。

此奴に少し握らせたお陰で、僕等は西南線に乘つてキングストンに着いた、僕等が其時乘つた列車はエクゼター行の郵便列車だつたさうで、僕等が立つた後ウヲーターループでは大騷ぎして郵便車を搜しても見つからず、皆烟に巻かれて居たと云ふ話を後になつて耳にした。

キングストンに着いたらボートは橋の下に用意してあつた。道を其方に取つてボートに行き、荷を積込んで其れに乘つた。

『宜しいか、』と言ふ人夫の聲に應じて、

『よし、〳〵。』と答へた。ハリスは櫂を掴み、我輩は舵の絲を操つり、モントモレンシーは船首に蹲り、部署各々定まると、僕等は二週間我が臥床となる水の上に矢の如く走り出でた。

六

柔かな木の葉草の葉が、濃綠色に色づいて、春に遲く夏に早き頃の昭輝ける朝であつた。此頃の氣候は成年の女と少女とを境せる境界線に、丸く鼓動を抑へて片足を踏み入れて居る、驚ける少女の心にも譬へられや日光に照り返されて河緣に繪のやうに傾き下つて居るキングストンの直

や、眞帆片帆を泛べてきら〳〵光つて居る河の面や、曳船の小道や、兩岸に立ち續いた清楚な別莊や、赤と橙色の運動衣を着て櫂を操つて居るハリスの姿や、遠方に隱見するチユードル朝の灰色の建物や、總て此等のものが相寄つて、眩しいやうな、併し何處となく穩かな、活動に充ち〳〵た而も又何處となく平和な、一幅の活畫を現出して居る。でうつかり眺め入つて居ると、まだ早朝とは云ひ乍ら、何時となく氣が遽くなつてうつら〳〵居睡りでもして居るやうな氣になつた。

僕は其時、サクソン朝の王樣方がまだ此處で戴冠式を擧げられた頃まで、普通キングスタンとして世に知られて居た此キングストンを暫時默想した。昔シーザー大帝が此河を渡つた頃は、羅馬の貔貅山の如く河べ雪崩る丘陵に屯した事もあつた。シーザー大帝は後半生に於けるエリザベス女王と等しく、到る處に龍車を留めたものと見える。唯だ違つて居る處は、帝は女王と較べると幾分自重して、女王のやうに宿屋がかりをしなかつたまでである。

ところが我が處女王は宿屋が大好きだつた。ロンドン近郊廿哩以內にある、一寸人目を惹くやうな宿屋で、遲かれ早かれ此女王が目をつけて足を留めて、其處へ泊らなかつた宿屋は未だ一軒もなかつた。ハリスが今假りに一新生面を開いて、一大偉人になつて、例へば一國の相印を帶びて死んだとしたら何うだらう。後世人民はハリスが最負にしてやつた宿屋の軒先に、「ハリス鯨飮の地」とか、「千八百十八年盛夏ハリス風邪の地」とか、或は「千九百八十六年師走ハリス門前拂ひの地」とか云つたやうな看板をぶら下げるものだらうか。僕は此れも一寸研究して置く可きだと思ふ。

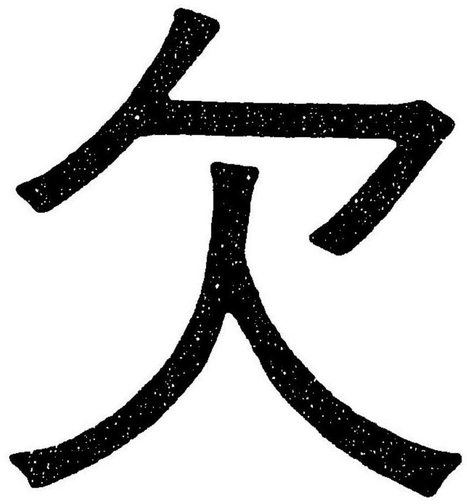
だが待てよ、此れは到底やり切れまいて。だから今度は逆にハリスが泊らなかつた家が有名になるかも知れん。そしたら「南ロンドンに於けるハリス非鯨飮の家」と云つたやうな看板が出ることだらう。すると後世の人民は何

故ハリスが其處だけに行かなかつたんだらうてな具合で、ぞろ〳〵見物に出掛けるに違ひない。

女性的の性格を帶びたエドウイ王は、徐程ケニングスタンが厭だつたに違ひない。戴冠式のお祭り騷ぎは此王樣には實際刺戟が勝ち過ぎて居た。砂糖漬を詰め込んだ猪の首などは第一此王樣にむく譯がない。（僕だつて此奴は少々恐入るからなあ。）王は甚肉酪漿に飽いて、最愛のエリヂと共に靜かな月光を樂しまんが爲め、人知れず盛宴の席を逃れ出でた。

遠くの方の御殿から酒宴の騷ぎが遠雷のやうに聞えて來る時、王は妃の手を取つて河に碎ける月光を窓際から眺めて居た。

すると獸のやうなオードーと、セント・ダンスタンがいきなり其處へ押し掛けて來て、美しい妃に不躾な嘲罵を浴せかけた上、無理に王樣を引きずつて再び狼籍な宴席へ投じた。兵馬倥傯幾星霜の後、サクソン朝は滅び、サクソ



MISSING

快晴の夏の日などには終日此光景が續く。其間川上にも川下にも列を作つた澤山のボートが水間に入る爲めに待合はせて居る。其れが水口に近づいたり離れたりするに從つて、舊城からハンプトン寺院に至るまでの間水は一面にきら〳〵する日光を反射して、恰も黄や、青や、橙色や、白や、赤や、石竹色で彩られたやうに見える。ハンプトンや、モースレーの人達は運動着を着て、犬を連れて、其處らを逍遙ひながら、巫山戯たり、烟草を吹かしたりして見物して居る。此方に鳥打帽にジヤケツ位を着た男が居れば、彼方に派手に着飾つた婦人連が見える。犬がぢやれて居るかと思ふと、ボートが通る、白い帆が見える。山が向ふに笑つて居る。河が此方に光つて居る。此等の物がごつちやになつて眼に入るところなどは殺風景な倫敦近郊には迚も見られない賑やかな景色である。

着物に對する人の趣味を見るには河に限る。そりや誰だつて何うせ何處か

で色に對する趣味を現はす機會はあるんだから、御望みとあれば僕だつて何時でも綺麗さつぱりとなつてお目に掛げる。僕は何に依らず、赤がゝつた色に少し黒を加味した奴が大好きだ。御承知の通り僕の髪の色は先づ黄褐色と云つたやうな色なんだ。否聞くが如くんばまア幾分其れに近い色なんだ。だから之に配するに暗紅色を以てすると甚だ調和がいゝ。其處へ持つて來て淡い青色のネキタイを付け、露西亞皮の靴を穿ち、腰に眞紅のハンカチフを巻き付ける、腰巻には此方が帶よりも數等立派だからね——するとそれ申分なしだ。

ハリスは何時も橙色か黄か、でなければ其混合色の物を用ゐるやうだが、余をして言はしむれば之は大に間違つてる。此男の顔色は何方かと言へばつとどす黒い方だから、黄色ではうつりが悪い。左樣黄色ハリスに適せず、此一語彼を評し得て極めて直截簡明だ。だから奴は宜しく青地に配するに卵色か白色かを以てす可きだ。併し服裝に關する趣味性の缺けて居る奴に限つて得て他人の忠告を容れないものだ。實に氣の毒と言はざるを得ない。其故如何にと云ふに、彼にして若し今少しく襟懐を廣うして人の忠告を容るれば、なあにハリスにだつてもつと能く似合つた色の一つや二つはあるんだから、其色の物を用ゐて山高の一つも被れば奴だつて滿更捨てた男ぢやないんだ。然るに此男、更に他人の言を容れないから、御覽の通り風采頗る昂らずさ。

ジョージはジョージで此度の旅行に態々下らぬものを新調し居つた。僕は見たばかりでうんざりして仕舞つた。何故つて奴の運動着が除りけばゝしいんだからね。併しジョージにそんな事を知らせるのは僕だつて厭だけれど、實際斯う言ふより他に適切な言葉が無いから仕方がない。ジョージは其れを持歸つて木曜の晩僕等に見せた。僕が其りやア何つて云ふ色かつて尋ねたら、知らないと言つた。察するに此男は色に一々名稱があるなど云ふ事は天から

知らないんだらう。商人は確か其れを東洋式の意匠だと言つたさうだ。ジョージは其奴を一着に及んで僕等の意見を徴した。するとハリスが晩春の頃花壇に掛けて鳥嚇しの案山子にするにはお誂向きだが、服裝としては、マーゲートの觀せ物の黒ん坊に着せるならばいざ知らず、苟も英國人の着物としては、見たばかりで反吐が出さうぢやと言つた。そしたらジョージはプン〳〵怒つた。併し此れはハリスも言つた通り、他人の意見が癪に障るんなら始めから聞かない方がましなんだ。

ハリスや僕が此服裝を喜ばないのは、斯んなものは得て人の注意を惹き易いからである。

娘共は小綺麗な服裝さへして居ればボートに載せてもさう見苦しいものぢやない。僕は殊にボート用の服裝が大好きだ。併し慾には御婦人方にボート用の服裝は何處までもボート用で、ガラス箱入の人形の着物ではないと合點して貰ひ度い。即ち其れを着てボートに乘れる着物と云ふ意味である。適ま乘した日にや遠漕の樂みは臺なしだ。此れも何かの因緣だつたらうが、僕は一度此種の令孃を二人程連れて遠漕に出掛けたことがある、いやはや其時ばかりは誠に以て閉口した。

兩人とも滿艦飾――レース、絹物の上張りで、花、リボン、ぴか〳〵ものの手袋、軟かな靴、いやはや仰山な服裝だつた。併し此れは寫眞館行きの服裝で、河行きの服裝ぢやない。所謂巴里最近流行のボート服と云ふ奴さ。遠漕の服裝はこれでは困る。斯んなものを着て居ちや、陸だつて、海だつて、よしんば又空中だからつて、堪つたものぢやない。

二人共先づボートが穢ないと考へた。そこで僕等は早速座を清めて綺麗になつたからと言つて見た。併し御兩人は別段綺麗だとも思つて呉れなかつた。

一人の奴が手袋はめた中指で座蒲團を一撫でやつて見て、塵が附いたのを連の奴に見せた。そして二人共青息大息で、其昔キリスト教の殉教者が斷頭臺に坐り心地を試したとでも云つたやうな腰付で臀を据ゑた。諸君櫂を操る場合には飛沫が飛ぶでしやう。すると、ね、其れが一滴でも着物に跳ねやうものなら、此人達は衣裳が臺なしだと云ふ考だ。(尤も其時ついた汚點は、後になつても取れなかつたさうだ。)僕は艫の方を漕いで居たから出來るだけ用心して漕いだ。櫂の先が二尺とは水面から上へ出ないやうにして、一櫂毎に手を止めては雫を切つた。そして返す櫂だつて矢張りさうだ、そうッと屓物にでも觸るやうにして、淺く平らな水に入れた。暫時經つと舳の方を漕いで居た奴が、君と一緒に漕いだつて、ちつとも漕いだやうな氣がしないから、別段差支へなければ僕は漕ぐのを止めて、ちつと君の漕ぐのを見て居やう、其方が遙に面白からうからと言ひ出した。併し何と言はれても僕は一切無頓着で

たゞ出來るだけ用心して漕いだ。けれども何うしても、娘達の着物にちつとも飛沫が飛ばないやうには漕げなかつた。奴等はそれでも凝乎と我慢して、何とも言はなかつた。そして唇を尖らかして片隅の方に小くなつたまゝ、飛沫が飛ぶ毎にぶる〳〵頭へて居た。奴等が凝乎と坐つたなりで此苦痛を堪へて居るのを見るのは、其實一寸面白くもあつたが、又内心少し氣の毒にも思はれた。僕これで極く小心の方だからね。併し、氣の毒と思へば思ふ程氣が焦つて、氣が焦れば焦る程、從つて又櫂が云ふ事を聞かなくなる。仕舞には僕も大分逆上せて來て、其結果飛沫が縦横に飛散し始めた。

今度は櫂を放り出して、舳の方の奴に交代して呉れと相談に及んだ。すると奴も贊成して僕等は位置を換へて見た。僕が舳の方へ行くのを見て、娘共はやれ有難い、お蔭で助かつたと言はんばかりにほつと溜息を吐いて、俄かに元氣づいた。馬鹿な奴もあればあるものさ。僕で我慢してりや其方が幾ら

よかつたか知れやしないんだ。何故つて今僕と交代した奴は、氣輕なガラガラした奴で、ニユーフオーンドランド産の小狗のやうに無神經な男だつた。此男は扨身の短刀を一時間續け樣に鼻先へ差し付けられて居たからつて、其れが眼に入るやうな男ぢやない、よしんば又其れが眼に入つたからつて、奴さん平氣で居るに極つてる、だから奴がうんと入れた櫂をぐつと跳ると、瀧のやうな飛沫が船一杯飛び廻つた。

これぢや船の中には立つて居ることも出來やしない。そして娘共の着物に一斗ばかりも水を跳ねかけると、奴さんさも愉快らしく笑つて、『やあ、何うも失敬しましたなあ。』とやる。そして此れで拭つて呉れろと言つてハンカチフを出す。娘共は小さな聲で、『いえ、何ういたしまして、』と斷つて居たが、そろそろ厥物で身體を包み廻した。お仕舞にはレースの蝙蝠傘を擴げて防禦した。

奴等は盡飯の時も大分いぢめられた。僕等は先づ草に坐れと勸めた。すると其草が埃だらけだ。其れから此れに掛けたらよからうと勸めた木の株も、是又長らくの間埃一つ拂つたものらしくも思はれぬ。仕方がないのでハンカチフを地べたに敷いて、其れに痔持尻と云ふ見えで坐つてると、其時ビフテキのパイが入つた皿を持ち歩いて居た奴が、何うした拍子だつたか木の株に躓いて、皿にあつたパイを宙に飛ばした。併しそれは幸ひ娘達には當らなかつたけれど、此事が更に奴等に新しい危險を思はせた。で奴等はますく〳〵びくびくもので、それからは若し誰かゞ引つくり返つて、又一騒動始まりさうなものでも持ち歩くと、其奴が何處かに落ちつくまでは、きよときよと其れを見守つて居た。

盡飯が濟むと舳を漕いだ友達が、『彼方へ參りましやう、一寸汚れ物を洗つて置かないちやいけませんから。』と言つて奴等を誘引した。

奴等は初めは友達の言ふ事が解らない態だつた。併し漸く合點したと見えて、洗ふ事を心得て居らんと言つた。

『ぢや僕が敎へて上げましやう、大變面白いものですよ。一寸此處に坐つて御覽なさい。いえ、さうぢやない、斯う岸によつかゝるんですあ、そしてざぶざぶやるんですよ。』と敎へてやつた。

姉の方が仕事服を着て居ないからと斷つたら、友達の野郎透かさず、

『何、それで澤山、少し斯う紮げてお爲んなさい。』と忠告した。

奴さんとう〳〵娘達に皿まで洗はせてしまひ居つた。そして斯ういふ洗ひ滌ぎも遠渣の樂みの一つだと言つた。すると、先生達も其れには面白かつたと返答した。

僕は今、あの男は當時僕等が考へて居たやうに馬鹿だつたかなアと考へて見る。蓋し誤れり、奴は決して愚物ぢやなかつた。たゞ奴には極く無邪氣な子供らしい點があつたのだ。

ハリスはハンプトン・コードで船を出て、トマス女史の石碑を見やうと言つた。僕が、

『トマス女史つて誰だい。』と尋ねたら、

『何うして僕がそんな事知つてるものか。けれども何でも珍らしい石碑だと云ふことだ。だから僕行つて見度いんだよ。』と答へた。

僕は不贊成を唱へた。僕は他の人間とは何處か作り方でも違つてるのか、何うも此の石碑といふ奴を見て歩くことが他人程面白くない。町か村かへ行つたら、早速其處の墓地へ行つて石碑を見て樂しむ。成程此れは行つていゝ事に相違ない。が、併し僕は此種の休養を餘り好まぬ。僕はせえ〳〵いふ老人の尻にくつ附いて、寒い陰氣な墓場を縫ひ歩きながら碑銘を讀む事には、

餘り興味を持たない。墓石に錆込んである龜裂の入つた眞鍮を見る事からして、僕には何うしても幸福だとは思はれぬ。

僕は趣味ある墓銘に對しても出來るだけ厭な顏をするし、又地方名家の由緒など云ふものに對しても至極冷淡だから、墓番の老爺は此れだけでも僕に愛想をつかす。

其處へ持つて來て僕が一刻も早く墓場を立ち退き度いやうな樣子をして見せるものだから、益々老爺の機嫌を損する。

朝日が黃金のやうにかんかん照つた或る朝のこと、僕はとある田舍寺を取卷いた低い石壁に身をもたせて煙草を吸つてゐた。そして靜かに落ち付いた四邊の光景から、深い悅樂を十分に吸收して居た。灰色の古刹には春常藤が茂つて、其前には彫刻を施した古風な戶がよろけて居た。高く繁つた楡の樹の間を白い小逕が丘續きに盤紆り下つて、草葺きの村校が綺麗に剪刀を入れた生垣の上からそつと覗いて居た。谿間には銀の針を落したやうな小川がちよつぴり流れて、其先には茂つた森が丘になつたまゝ波のやうに何處までも續いて居た。

古風で詩的な處があつて何とも言へぬ景色だつた。

僕は暫時恍惚となつて、所謂氣廣く、體胖かに、もう罪な事も考へまい、惡い事も思ふまいと云ふ氣になつた。此處に來て、此處に住つて、心に邪を思はず、淸く美しき餘生を樂んで、鶴髮痩軀、それから何、それから何と、こんな神々しい考へに包まれてゐた。

此瞬間僕は友人親戚の罪惡を忘れ、却つて彼等の爲めに祝福した。併し彼等は其時僕が此僻地に居て、彼等の幸福を祈つて居たなどゝは夢にも知らず、矢張り罪と汚れの道を辿つて居たに違ひない。然るに僕は其時彼等の爲に祝福し、又眞實其幸福を希つて止まなかつたんだから、實際彼等にも其事を知

らせてやり度いと思つた。僕は續け樣に斯んな崇高な考に浴つて居ると、其時僕の瞑想は端なくも、

『旦那俺が今行くでがアす、待つて居なさろ。』といふ厭な嗄れ聲に攪亂され て仕舞つた。僕は驚いて其方を見た。すると禿頭の老爺が脚を運ぶ度毎に、鍵をちやらちやら鳴はせながら、寺の境内を此方に歩いて來るのが目に付いた。

僕は殊更嶮しい顏付をして、彼方へ行けと手眞似をして見せた。すると老爺、

『旦那今俺が行くでがす、若え時は斯うでもなかつたが、俺此頃ア足が不自由で困りますだ。今其處へ行くから待つて居なさろ。』と大きな聲を出しながら此方へやつて來る。僕が、

『お前は用は無いから行けッ。』と言つたら、

『俺大急ぎでやつて來ただアに、お袋が今まで氣付かなかつたものだから遲くなりましたべ、旦那俺の後について來なさろ。』と何處までも圖々しい。

『行けつたら行かないか。恐圖恐圖してると壁を飛び越えて往つて殿打りつけるぞ。馬鹿め。』野野これには辟易したと見えて、

『墓ア見なさらねえだかね。』と言ふ。僕は、

『知れた事だ、乃公は斯うして壁に倚つかゝつて居たいんだ。五月蠅いからお前は早く彼方へ行け。乃公は今美しい事を考へてるんだ、其れが如何にも氣持がいゝ。乃公は晩までも此處に凝乎としてるんだ。此處へ來て墓石が何うの斯うのと下らん事を喋舌つて貰はんでもいゝ。お前は彼方へ去つて一文でも金がかゝらんやうに、穴へ投り込んで貰ふ算段でもしろ。そしたら乃公も半口位は加つてやる。』と言つてやつた。

老爺一時は呆氣に取られて眼を擦つて居たが、又ぢつと僕を見詰めた。併

し何う見ても矢張り人間に相違ないらしいんで老爺益々面喰つて居る。

『お前さあついぞ此邊ぢやア見かけない人のやうだ。』

『さうだとも、だから貴樣はそんな事訊いてるぢやないか。』

『そんな事何うでもいゝけに、旦那お石塔を見て行きなさろ。いゝ御墓だ。

——棺桶もいゝぢやちうに。旦那何うだな、見て行かねえか。』

『馬鹿ッ、石塔は見たくないつて言つてるぢやないか。石塔なんか何で又見たいことがあるもんか。何處の家にだつて墓はある。馬鹿め、ケンセルの墓地に行けばポッヂア伯父の豪い石塔が立つてらあ。近鄕中の評判だ。又ポーつて云ふ處にや祖父の墓がある。其墓なんか人が八人立つてもいゝ位遊びを取つてあらア。それからフィンチレーにや伯母のがある。煉瓦造りで上には珈琲茶碗見たいな彫刻までしてあつて、周圍には一枚十圓もしやうつてな五寸角位の白い石が一面に舖き詰めてあらあ。墓を見に行くからにやア、乃公

はこんな處へ行つて見るんだ。眞の他人の墓なんか何んで見度いもんか。併しお前が投り込まれたら、一度來て回向位はしてやる。今は用は無いから行けッ。』

僕がびし〳〵斯う言つてやつたら、老爺とう〳〵泣き出し居つた。そして此處の墓地には人間の立ち腐れが其まゝ化石したものらしい石塔や、誰が見ても解らぬ妙な文字を刻み付けた石碑もあると言つて、切りに僕の好奇心を焚き付けた。

併し僕が頑として動かないものだから、老爺とう〳〵癪が緩んだやうな聲を出して、

『もう一つ名物窓ちうのがあるが、其れを見て行かつしやらんかね。』と言つた。

其奴も見度くないと言つてやると、老爺最後の手段に訴へて、

『旦那俺髑髏を二つ掘り出してあるだよ。其れを見て行かつしやい。えゝ旦

那、お前さあ日曜だから出掛けさしたんぢやろ。慰みに見て行かつしやい。
え、』と小聲で私語いた。

僕はくるりと向きを變へて一目散に駈け出した。

すると後から、

『髑髏を見てくんなさろ、見てくんなさろ』と大聲に喚いて居るのが聞えた。

ハリスは併し、石塔、墓、墓銘、碑文と、斯んなものが大好きだ。だから
トーマス女史の石碑が見られなかつたとつて氣狂ひのやうになつて居た。彼
は此端艇旅行の話が持ち上つた頃から、既に女史の墓を見るのを樂みにして
居つた。だから若し此度の旅行に此一事が包含されて居なかつたら同行する
んぢやなかつたと言つた。僕はハリスにそんならジョージを何うする積りだ、
今夜五時までにはボートをセパアートンまで廻して奴を待ち受ける用意をし
て居らねばならんぢやないかと言つたら、先生今度は鋒先を轉じて、『一體ジ

ョージは終日何をやつてるんだ。此重たいボートを河一杯引きずらせて置いて、何處其處で待つて居れなんつて氣がよ過ぎる。奴何故一緒に來て仕事をやらんのだ、一日位は仕事を早く切り上げて來たつてよさゝうなものぢやないか。へ、銀行が聞いて呆れらア。奴銀行に居つて一體何を爲てるんだ。』と散々ジョージを罵倒した。

ハリスはそれから、『おい君、ジョージは何時銀行に往つて見ても遊んでばかり居るんだよ。鼻の先にコップなんか置きやがつてさ。奴其蔭で何かやつてるやうな顏をして一日なまけてるんだ。何うせ物の蔭なんかだと碌な事はありやしない。乃公だつて食ふ爲めにやちやんと働いてる。何故奴一人なまけてるんだ。一體銀行で奴何をやるか。人が金を持つて行きやさつさと取り込む癖に、切手を持つて行きや「無効だ」の「振出人不明だ」のと、一杯インキを塗りくつて突き返す。あんな事したつ

て何の役に立つものか。僕は先週二度も此手でペケを食はされた。もう癪だから二度と銀行へなんか往つてやりやしない。預金だつてさつさと引き出して了つてやらア。だつて君ジョージが一緒に來てさへ居りや、僕等だつて展墓も出來やうぢやないか。奴今果して銀行に居るんだか何うだか解りやしない。惡くすると何處かで隱れ遊びをして居やうも知れん。奴だとそれ位の事は屹度やる。そして僕等ばかり甚い目に合はせくさるんだ。乃公アもう厭になつたから何處かで一杯引つかけて來るよ、ゼローム君。』とハリスは矢鱈に不平を並べた。

ハリスが斯んな事を言ふから、僕は其れもよからうけれど、此處から宿屋までは二三哩もあるから駄目だらうと言つてやつたら、先生今度は河に喰つてかゝつて、河が一體何になるんだ、渴き死なうとて河に來る奴が何處にある。と毒づいた。

ハリスが斯うなつたら、放つたらかして置くに限る。此男は言ふだけ言つて仕舞へば、後は何ともなくなるんだから。

僕はそこで、幸ひ籠の中にはレモンの濃いのがあるし、大瓶に眞水も用意してあるから、一寸調合さへすれば、冷つこい奴が飮めるぢやないかと言つて聞かした。

そしたら今度はレモン酒や、生姜水、イチゴ酒其他まだ此種の飮料で、奴が平生日曜學校式だと言つてくさしてる飮料に喰つて掛つた。そして其言ひ草が面白いや。斯んな物は消化を惡くするから身體によくない。現に英國に於ける罪惡の過半は奴等の産物だつてさ。

併しそれでも何か飮まにやならんと言つてシートに上つた。そして德利を出さうと思つて及び腰になつた。ところが德利は籠の底になつてるものだから一寸見つからない。先へ先へと仲し懸つて、倒さまの姿勢を取つたまゝ、爲

らずに置けばいゝ事に、船を進めやうと思つて、野郎うつかり曳綱を引つ張つた。すると引く筈でない方の綱を間違へて引つ張つたものだから、ボートの舳がづる〳〵と狂つて、ごとーんと岸にぶつかつた。其はずみに野郎眞逆様に籠の中へ頭を突き込んだ。兩足が二本見事に宙に跳ね返つて、身體は憫慨よろしくと云ふ見えで舷側に支へられたまゝボートの上に毬鋒立だ。身動きをすればするほど籠の中へはまつて行くばかりだから、野郎僕が側に行つて引き出してやるまで、依然として逆立の藝當をやつて居た。そして引き出してやつたら益々怒り散らした。

八

僕等はケンプトン公園の柳の木の下で行厨を食つた。此處は一寸した處ではあるが景がよくつて、柳の木が一杯繁つた小高い草原が河に沿うて起伏し

て居る。もう二皿だけは平らげて仕舞つて、三度目にパンとジヤミを平らげやうとしてると、其時シャツの袖をむき出しに着て短かいパイプを喞へた紳士體の男が突然僕の側に現はれて、君等は不法行爲を働いて居るが、自分にも其れが解つて居るのかと訊ねた。僕等は其問に對つて十分の確答を與へ得る程目下の行爲に就いて周到な注意は拂つて居ないが、若し君が一個の紳士として、僕等は確かに不法行爲を働いて居ると斷言するなら、僕等は必ずしも其言を否定することはせまいと言つた。

そしたら奴、君等は今現に不法行爲をやつてると斷言したから、僕等は御厚意有り難うと謝辭を呈した。野郎それでも逡巡躊躇して容易に其場を去らない。そして何か物欲しさうな面付をして其處らをうろついて居る。だから僕がまだ何か用事があるのかと尋ねると、同時にハリスの野郎は『何うだ一つ食はんかい、』と言つて、ジヤミを塗つたパンを奴の鼻先へ突き付けた。

其時僕は此奴ジヤミ附きのパンを食はぬと云ふ結社にでも入つてるのかと思つた。何故つて奴其時ジヤミ付きのパン位に誘惑される乃公ぢやないつて な面構へで、其れを拒ね付けたからだ。そして君等を追つ拂ふのは乃公の義務だと敦圍いた。

するとハリスは、其れが君の義務ならさうした方がよからう、併し君は其れを遂行する最上策を研究してるかと訊いた。ハリスは世人が稱して一番形と云ふ方の肥大漢で、相貌頗る頑健だ。奴其時ハリスの頭から足の爪先までジロリと見た。そして到底敵はぬと思つたものか、一先づ歸つて主人と相談の上、再び出直して君等を河へ放り込んでやると言ひさますたすた歸つて行つた。それつきりで、奴二度と顔を見せなかつたが、其實奴金を強請りに來たんだ。夏になると斯んな事をして金を儲ける河岸泥棒が澤山現はれる。奴等は河岸をうろついて、今のやうな遣り口で氣の弱い奴を騙つて金をせしめる。そして何時も主人なる者を笠に着て現はれるのが奴等の十八番だ。もんな場合には、自分は云々の者で、又云々の番地に住んで居る者だから、用事があるなら直接御主人に會ひに來て貰はう。草原に坐つた損害が要るなら相當の賠償もしやうから。と言つてやるに限る。併し大概の人は臆病で、生半弱ると來てるから、何時も奴等の言ひなり放題になつて、少しでも強く出て、奴等を叩ませてやらうなどゝ考へて居ない。だから益々奴等につけ込まれてお仕舞にはひどい目に合はされる。それに又河岸ッ地の地主なんつて奴等も年毎に横着になる。奴等の言ひ通りになつてゐた日にや、テームス河は早晩封鎖されて仕舞ふ。奴等は支流にも其慣用手段を應用して居る。奴等は河床に杭を打ち込んで、岸へ鎖を渡して、兩岸の樹には高札を立てる。僕は此高札を見たばかりでも業が沸く。これを見ると一つ一つ引つこ抜いて、其れを立てた奴の頭に串刺しにして、墓穴へ放り込んで、石塔の代りに其奴を上か

ら突き立てゝやり度くなる。

僕はハリスにこんな考だと話したら、奴はそれでもまだ手緩い。乃公なら片つ端から奴等を打き殺して、其一家族は申すに及ばず、親戚朋友を殲滅にした上、其家に火をかけて灰にしてやり度いと言つた。僕が其れは少し惨酷だと言つたら、ハリスは、

『惨酷なものか當然さ。家が焼けたら其焼跡に行つて馬鹿歌でも歌つてやらあ。』と言つた。

僕はハリスがあまり殺伐な事を言ふから聞いてるのが厭になつた。人は其本然の良心をこんな殺生な考へに墮落させちやならん。僕は奴の考をも少し基督教的の考に向はせるのに大分苦心した。併し漸く其思想を一轉させてやつたところ、野郎、それぢや友達と親戚を殺す事と、家の焼跡で馬鹿歌を歌ふ事だけは勘辨してやらうと言つた。

諸君の内まだハリスが馬鹿歌を歌ふのを聞いた人はあるまい。若し聞いた人があれば、僕が今何れ位人類社會に貢獻したか位は解る筈なんだ。此男は自分では其所謂馬鹿歌が非常に巧いと思つてるが、全く反對で、彼の交友間には奴が馬鹿歌が巧いなどゝ信じてる者もなければ、巧くなるだらうと思つてる者もない。況んや奴に歌つて貰はうなどゝ考へてる者などは唯の一人も居やしない。

何か會でもあつた時に、誰かハリスに一つやつて呉れないかてなことでも言ふと、奴屹度、

『馬鹿歌でよけりやるけどねえ、』と言ふ。然も其口調たるや、「人宜しく萬事を放ツたらかして余の歌を拝聴す可し、晨に之を聞けば、夕に死すとも可なり」ツてな調子だから堪らない。

『爾ういふ時に、馬鹿歌ですつて、まア何より結構ですわ、早く聞かして頂

戴な。』と下宿の山の神などが乗り出す、するとハリスは言下に起立してピアノの方へ行く。而も余將に慈悲を衆生に垂れんとしつゝありツてな態度だからうんざりする。

『東西〳〵、さあ皆さん靜かにしましやう。これからハリスさんの馬鹿歌が始まるんですから、』と山の神が一座を見廻す。

『まア、何んなに面白いんでしやう、』と私語く聲が方々に起る。俺も我もで臺所や物置から走り込んで來る、ドタバタ階子段を駈け上る、家中走り廻つて誰彼の差別なく引ツ張つて來る、大勢客間に駈け込んで圓陣を造る。そして堅唾を飲んで今か〳〵と待ち設けて居る。

ハリスは其處でいよ〳〵始める。

併し馬鹿歌だから、聲の善し悪しを種々言つたり、文句を何處で何う切つて、又其抑揚を何う附けるなどゝ、そんな事を餘り八ケ間しく詮議立てされては困る。それから歌つて行く際餘り聲が上り過ぎると思つたら、歌ひ手が直にどんと聲を落すこともあらうし、調の緩急高低だつて、是又歌ふ者の自由意志にあるんだから、そんな事を餘り細かにほじくられても困る。それから歌ふ奴が樂器より二小節も先の方を歌つて居やうと、又唱歌最中樂手と談判を開始する爲め一時調子を緩めて置いて、更に又本調子に返らうと、そんな事は頓着なく、聞く方では只だ歌の文句さへ解れば、それで結構と覺悟して居て貰ひ度い。

又歌ふ奴が最初の一聯を初めからたツだ三行だけ諳記して居て、樂手が初聯を終つて聽衆が句切り〳〵の合唱に加はるまでは、覺えた處だけを繰返し〳〵やつて居やうと、或は折角覺えた三行を、一行目でもう行き詰つて『おや仕舞ツた、』と薄笑ひしても、幸ひ又後句を思ひ出して歌つてさへ行けばそれで上々吉、今度は又ずツと先まで歌つて置きながら、前の處は覺え違ひと

俄かに感付いて、聴衆へは一言の断りもなく、又も一度後戻りして、前に間違へて歌つた處を訂正して再び歌ひ直してお耳に入れやうと、そんな事は一切苦しからずと觀念して戴かねばならぬ。何は兎もあれ僕は此處でハリスの歌ひ具合を一つ諸君に御紹介して置くから、其の先の判斷は勝手にして戴き度い。

ハリス。（樂器の前に立ち、待ち兼ねたる聴衆に向つて言ふ）『歌は少し黴菌臭いんで御座りまする、ハイ。これは皆さん先刻御承知で御座いましやう、ハイ。併し此れが私の十八番で御座りまして、ハイ。歌と申します るは『ビナフヲア』中の法官が歌へる歌で御座います。——いや、申上げやうと致しますのは、その今の『ビナフヲア』の事ぢやないんで——今の何で御座りまする——もう此れだけ申上げたら皆さんお解りでもありま

しやうが——えゝと、その今の何で御座りました——はい、左様。私此の處にて一聯相濟ましました上は、どうか皆さんに合唱をして戴き度いんで、ハイ。』（合唱と聞いて聴衆中或る者は喜び、或る者は氣遣ひ、私語の聲盛んに起る。神經質の樂手『審判官の審議』中の法官の歌に對し嘲哄たる前曲を奏す。ハリス樂器に連れて歌ふ可き時至る。ハリス而も之を知らず。神經質の樂手又更に前奏を繰返す。ハリス同時に合唱を始めて『ビナフヲア』中の公爵が歌ふ歌を唱す。而して其初めの二行を早口に歌ひ終るや、性急なる樂手之に後れん事を維れ恐れ、倉皇曲を奏す。而も到底ハリスに追隨する能はざるを見て奏樂を中止す。ハリス其時更に法官が歌へる歌を始む。樂手之と合奏せんと試み、而も遂に亦ハリスに追隨する能はざるを見るや、今自ら爲しつゝある事を思ひ、又自ら曲を進め得る程度を考へ、到底ハリスと伍する能はざるを知つて斷然奏樂を中

止す。）

ハリス。（樂手を慰むるもの丶如く聲を和らげて）『其れでいゝですよ、よく合つてるぢやないですか。ずッと續けて下さい。』

神經質の樂手。『何だか違つてるやうです、貴方一體何を歌つてるんですか。』

ハリス。（怫然色を作して、）『何だつて君、『審判官の審議』の中の法官が歌へる歌をやつてるんぢやないか。君一體何うしたんだ。』

ハリスの友人。（後の方より）『おい君何をとぼけてるんだい。君は『ピナフヲア』中の將軍の歌をやつてるぢやないか。』

（ハリスが唱しつゝある歌曲に就いて、ハリス及び其友人の間に長時間の爭論ありて後、友人はハリスにして若し唱歌を續けたらんには、其何を歌ひつゝあるかを強て問はざる可しと言ふ。ハリス憤怒の情を制し、再

び樂手に向つて奏樂す可きを乞ふ。樂手即ち將軍の歌の前奏を始む。ハリス之と合唱す可き機會を捉へ、更に又合唱を始む。）

ハリス。「若い頃から代官樣の、お白洲番に呼び上げられて。」

（大笑の聲起る、ハリス之を喝采の聲なりと誤認す。樂手は到底事の爲す可からざるを知り、而も又ハリスと爭ふも勝利の望なきを看破し、爭うて利なきは歸りて妻子を愛すの智なるに如かざるを見て壇を下る。樂天的の樂手之に代りて壇に登る。）

代りたる樂手。（聲を和らげて）『さア、お始めなされ。前奏は拔きと致しましやう。』

ハリス。（漸くにして樂手の言ふ所を感知したるもの丶如く、笑ひ出しながら）『いやア、眞平々々。さうだつた。僕は二つの歌をごッちやにして歌ひました。さうだつた。僕ゼンキンさんのと取ッ違へて居つた。ぢや改めて

一つ願ひましやう。』（ハリス歌ひ始む。其聲穴倉の中より來るが如く、又地震の鳴動遠くより聞え來るに似たり。歌に曰く、）

「小さき頃より奉公の、身は代官のお屋敷へ。」

（樂手に向ひ、小聲にて）『御老人少し聲が低かつたやうぢや、も一度唱り直して見やう、お差支なけりや。』

（と再び別誂への聲にて大聲にやり出す。一座驚倒す。）圍爐裏の傍に在りし神經過敏の老媼は、此時大聲に泣き出し、遂に室を出でざる可からざるに至る。）

「お窓の掃除、戸の掃除、それのみか又……」

『……ぢやアなかつた、此奴ア間違つた。大戸の窓の掃除をしたんだ。それから床を磨きの――ぢやない。――拭つたんか――一寸御免下さいよ――何だちつとも解らんぢやないか、奇ッ怪、奇ッ怪、何うもあの初め

の一行が思ひ出せないやうぢや。待てよ、それのみか又、――それのみか又――おうさうぢや、それから合唱の處だつた。此奴はいゝ鹽梅だ。』

（と歌ふ）

「それのみか又、それのみか、それ〳〵のみか、それのみか。

今は帝國海軍の、司令長官、大將軍。」

『さて、いよ〳〵合唱ぢや――だから此處は、今の二行さへ繰返して貰やアいゝです。』

聽衆の合唱。

「それのみか又、それのみか、それ〳〵のみか、それのみか。

今は帝國海軍の、司令長官、大將軍。」

（御當人のハリスは自分で何れ位馬鹿を見て居るか、又罪咎もない人間を何れ位苦しめて居るか、そんな事は一切頓着なし、却つて自分は大に人

様を面白がらせてやつた位なお目出度い考で、晩餐が濟んだら又一つ馬
鹿歌を歌つて上げましやうなどゝ言ふ。）

馬鹿歌の話の序に僕は一度自分も其れに加はつて居た或る席上で、實に奇
體な出來事があつた事を思ひ出した。此事件は人間内部の理智作用を明快に
説明して居るやうに思はれるから、僕は筆序に宜しく餘白を借りて其事に言
及す可きだと思ふ。

其集會に出席して居た奴等は何れも一世の流行兒で、一通り修養もある連
中だつた。皆別誂への着物を着て、上等な談話をやつて、頗る得意がつて居
た。尤も其中に二人程獨逸から歸りたての蠟殻の青年が居たが、此二人だけ
は例外で、何だかきよときよとして時間の經つのが如何にも待ち遠いと云つ
たやうな風だつた。要するに僕等が餘りハイカリ過ぎて居たんだ。だから僕

等の上等な會話や、高尚な趣味が奴等のとは餘りかけ離れてゐた。僕等から
言はせると、奴等は餘程時代後れで、兎に角こんな席に出たのが間違つてゐ
た。後になつて誰もやはり同じ事を言つてゐた。

僕等は獨逸の大家の曲を合奏したり、倫理や哲學を談じたり、威嚴を損せ
ない限り馬鹿騒ぎをしたり、又體裁の宜い所で洒落の一つも言つて見たりし
た。

誰だつたか名は忘れたが、晩餐の後で佛蘭西の詩を朗誦した奴があつた。
僕等はやんやと其れを喝采した。其後で或る令嬢が極く感情的な西班牙の流
行唄を歌つた。其れが又非常に憐れッぽくつて、中には其れを聞いて泣いた
者もあつた。すると其時前に言つた蠟殻の先生達が立上つて、僕等にスロー
セン（此人は丁度其時會に來て下で晩餐をして居つた）先生が、道化歌を歌
ふのを聞いたことがあるかと尋ねた。

誰一人として其人の歌を聞いた者は居なかつた。

二人の青年は、此人の歌は非常に面白い、若し聞き度ければ、幸ひスローセン先生は能く知つてるから一つ歌つて貰つてもいゝと言ひ出した。其話に依ると先生の歌は面白いこと無類飛切りで、獨逸皇帝なども一度其れを聞かれたものであるが、餘り面白くて座に堪へることが出來ず、中途で床に就かれた位だと言つた。

奴等は又、スローセン先生程道化歌が巧い人は無い、而も先生は歌つて居る間は笑顔一つ見せない、聞いてる方では悲劇の文句でも歌つてるのかと怪しむ程で、其れが益々聞く人を笑はせると言つた。そして先生は笑ふと可笑しみがなくなるから自分で歌つてる間は其態度にも調子にも、決して可笑いと云ふやうな風を鵜の毛程も見せないと言つた。で面白くつて堪らないのは、一見却つて悲哀に近いとまで思はれる、先生の眞面目な態度だと言つた。

僕等は其處で口を揃へて、何でも一つ其歌を聞いて腹がよれる程笑つて見たいと言つた。すると二人の青年は下へ行つて、スローセン先生を連れて來た。

先生は直ぐ上つて來て、口も利かずに樂器の前に坐つた所を見ると、喜んで承諾したものらしかつた。

『眞個面白いから屹度笑ひ出しますよ。』と青年は座を横ぎつて、壇の方へ進みながら小さな聲で言つた。壇に上ると二人とも先生の後の方へ小さくなつて坐つた。

スローセン先生は自ら樂器を調べて歌ひ始めた。併し前奏は正しく道化歌の前奏のやうには思はれなかつた。何だか恐ろしいやうで、又ひどく精神の籠つたやうなものだつた。聞いて居ると肉を嚙かれるやうで、何となく妙な氣がした。併し僕等は此れが矢張り獨逸風だらうと私語き合つて、早く其先

を聞き度いと思つた。

僕は獨逸語を知らない。尤も學校では習つたことがあるんだが、卒業後二年も經つと、悉皆忘れて仕舞つて、今では却つて其方が氣樂でいゝやうである。併し此時僕は人の手前何だか獨逸語を知らんやうな顏付はし度くなかつた。で一つ甘い方法を案出した。即ち眼を壇の後方に居る二人の青年に注いで居て、其顏付を見守りながら、若し二人が微笑を漏らせば此方でも微笑を漏らし、二人が大聲で笑へば又同じく呵々大笑することにした。そして又時には獨りで面白さうに薄笑ひなどしても見た。是は畢竟他人が可笑しいのを、自分も可笑しく感じたと人に思はせ度いからであつた。併し自分でも此れは何だか餘り技巧的だとも思つて見た。

僕は歌が漸々佳境に入るに從つて、外の奴等も矢張り自分のやうに二人の青年を注視してるんだなと思つた。何故つて、他の奴等も矢張り二人の青年

が微笑すれば微笑し、大笑すれば大笑したからである。そして二人の青年が微笑したり、大笑したり、或は又やり放しに笑ひ續けたりした時などは極めて面白かつた。其れにも拘らず本尊のスローセン先生は一向可笑しいやうな風もしなかつた。殊に僕等が始めて笑ひ出した時など、先生笑ふとは實に怪しからぬと云つたやうな顏付をした。僕等には此れが又非常に面白かつた。

そして其眞面目な態度を先生の滑稽手段だと思つた。だから其際若し先生が自分も矢張り可笑しいんぢやと云ふ事を、曖氣にでも見せやうものなら、面白味は全然無くなつて居たんだ。で僕等が益々笑つて居ると、先生の怪訝顏は苦痛憤怒の色と變つて、遂には恐ろしい血相をして僕等を睨めつけた。併し後方に居た二人の青年だけは睨まれなかつた。）僕等は又共と笑ひ出した。

そしてお互にもうやり切れない、文句だけでも可笑しくつて堪らずに居る處へ、あんな顏付までされちやア迚も堪らんと言ひ出した。

最後の一段になつて先生うんと力瘤を入れた。そしてそれは〳〵恐しい顔付をしてじろりと一座を睥睨した。僕等は前以て獨逸の馬鹿歌朗吟法を聞いて居なかつたら、其顔を一目見たばかりでぎよつとするのだつた。殊に其間に挿まれた一曲の如き、悲しいやうな痛ましいやうな如何にも不思議なもので、僕等は先生が馬鹿囃子をやつてるんだと思はなかつたら、屹度其ればかりでも泣き出したらうと思はれた。

皆がきやッ〳〵と大笑してる最中に先生は朗吟を終つた。僕等は生れて初めて斯んな面白い歌を聞いたと感嘆して、實際こんな事實さへあるのに、何故世間では獨逸人に滑稽の才が缺けて居るなどゝ評して居るかを怪しんだ。

だから僕等は先生に今の歌を英語に譯して貰つて我が同胞にも遍く其興味を分つて遣つたら、英人も馬鹿歌に對する趣味を養ふ事が出來るだらうとまで言つた。

スローセン先生は立上つて如何にも澁い顔をした。そして解りもせぬ獨逸語で僕等を恫喝した。（僕は獨逸語は此手段に用ゐるには最も有効な言語だと思つた。）それから跳つたり、腕を振り廻はしたりして自分が知つてるだけの英語で僕等を馬鹿野郎と罵つた。——そして今日まで未だ此れ程馬鹿にされた例はないと言つた。

先生が其晩歌つた歌は、何うも馬鹿歌ではなかつたらしい。歌はハルツと云ふ山奥に住んで居た一人の乙女が、其情人の命を救ふ爲め自分の身を殺して、死後再び自分に後れて死んだ情人の靈と相會する。と情人の靈は身を捨てゝまで彼を救つた乙女の靈を欺いて、他の情人の事を知ると云ふ筋で、最後の一節は男の靈が女の靈を捨てゝ去る處らしかつた。僕は委しく其内容を知つてるのではないが、こんな譯で其晩の歌は極く哀れな事を歌つたものらしかつた。スローセン先生は嘗て此詩を獨逸皇帝の前で朗讀した時、帝は子

供のやうに聲を出して泣かれたと言つた。其話に依ると、此歌は獨逸の詩篇中で最も悲愴なものゝ一つださうである。

斯うなると僕等は間が悪くつて仕方がなかつた、何う言つて詫を入れたものか、實際言葉に窮した。二人の青年はと見廻すと、もう影も形も見えない。歌が終るとこつそり會場を逃げ出して了つたのだ。

會は斯んな具合にして終を告げた。僕はまだ其時程靜かに終つた會を見たことが無い。誰一人『さよなら』と言ふ者さへなかつた。僕等は靜かに暗い方を歩いて皆一時に階下に下りた。給仕に帽子や外套を出して貰ふにも小聲で催促して、獨り手に戸を明けてこつそり外へ出た。そして誰も彼も互に避け合つて居るやうな風で曲り角を曲つた。

僕は其時以來獨逸の歌曲を面白いとは思はなくなつた。

僕等は午後三時半にサンブリの水門に着いた。水門の處は、水が何れ程穩かで又堰内の水が假令鏡のやうに澄んで居ても、早瀬を漕ぎ上げるのは厄介だから止めた方が宜い。

僕は一度やつて見たことがある。其時僕は漕いで居た、前から舵を取つて居た奴に上れるだらうかと訊ねて見たら、しつかり漕いだら大丈夫だと言つた。瀬の上の處には橋が架つて居た。舵手が大丈夫だと言つた時僕等は丁度其下に居つた。僕はうんと先へのめつてぐツと引いた。

漕ぎ方に申分はなかつた。僕は調子を取つてぐん〳〵漕いだ。腕、脛、及び脊中の力を一本のオールに込めて、深く入つた櫂をうんと跳ね〳〵した。

漕ぎやうが早いから水沫が頻りに飛ぶ、目覺ましい漕ぎ方だ。二人の友達は見てるばかりでも面白いと言つた。五分も經つてからもう疾うに堤防の間は漕ぎ拔いたらうと思つて見上げて見ると驚いた、依然として橋の下に居る。

而も漕ぎ初めた時と同じ場所に固定して居る。橋の上から見て居た二人の馬鹿野郎はきやッ〳〵笑つて居た。僕はボートを橋の下へ漕ぎ据ゑて置く爲めに狂氣のやうになつて漕いで居たのだ。僕は其後瀬の早い處は必ず外の奴に漕がせることにして居る。

僕等はウヨールトンまで漕ぎ上つた。此處は川沿ひの町としては可なり大きな處である。河沿ひの町は皆斯うであるが、此處も矢張り河に沿つた方は人家が極く稀疎で、ボートから見た所では全戸合せて十二三戸もあらうかと思はれる位な小村としか見えない。牛津から倫敦までの間で、河から見て町らしく思はれるのは、僅かにウインヅールとアビングドンだけである。外の處は只だ場末の町が河に覗き出て居る位で、河の方からは大概蔭になつて居る。河岸の町が何れも此れも斯んなに引ッ込み思案をして、森や、畑や樋や、堰に、河岸を譲つて居るのは、僕等には何より有難い。

レッヂングだつてさうだ。此町なんか出來るだけ河の中に勢力を張つて、成る可く河を汚く醜くしやうと心掛けて居ながら、感心な事には自分の醜い顏が河から見えないやうにと非常に苦心して居る。

ウヨールトンには、シーザー大帝が陣地を敗いたらしい跡がある。野營したか、濠を廻らしたか、何でもそんな事だらうと思はれる。シーザーは河邊の名人だつた。

ウヨールトンには又エリザベス女王も行つて居られる。英國中女王が行つて居られない處はあまり無い。クロムウエルや、ブラッジョー（旅行案内を作り出したブラッジョーぢやなくつて、チヤーレス王の首を斬つた方のブラッジョーだ。）が又此處へ來て居る。僕は此連中を一緒に寄せて見たら、一寸面白い配合だらうと思ふ。

ウヨールトン寺院には鐵の「責め轡」がある。此れは昔女の舌を曲げる爲め

に用ゐたものだが、今日此刑罰は廢れて居る。其の理由は、鐵が漸々少なくなつて來た所へ持つて來て、他にまだ此れだけ堅固な金屬が出て來ないからでもあらう。

此の寺院には有名な墓がある。僕はハリスが又其れを見ずには置くまいと思つて氣が氣でなかつた。處が不思議にも先生其れを氣付かなかつたらしい。だから此處は事なく通り過ぎだ。橋の上手は河が恐ろしく曲折して居る。此れは見るには結構だが、「曳く、」「漕ぐ、」と云ふ點から見ると厄介である。こんな處では得て曳く奴と舵を取る奴との間に喧嘩が始まる。

右手に當つてオートランド公園がある。此處は古いので有名だ。ヘンリー八世は誰からか此地を失敬して、此公園に住まつて居られた。公園の中には有名な洞穴があつて金さへ出せば誰でも見られる。世人は此處を大騷ぎするが、僕は其れ程にも思はぬ。

オートランドに居たヨークの故の伯爵夫人は犬が大好きで、澤山な犬を飼養して居られた。そして死んだ犬を埋葬する爲め、夫人は特に其墓場を作つた。其處には犬の墓が五六十もある。而も皆石塔を立て、一々名まで彫り付けてある。左樣犬だつてそりやア、可愛がられて死んだ後は、石塔位は建てゝ貰つてもいゝ譯である。

ウヲールトン橋の直ぐ上手の曲り角がコーウエー・ステークで、シーザーとカシブローナスが戰爭した處だ。カシブローナスは河一杯逆茂木を樹てゝシーザーを迎へた。(逆茂木には勿論「此河渡る可からず」と書いて貼り付けたらう。)それでもシーザーは平氣で渡つた。誰もテームス河からシーザーを驅逐し得た者はなかつた。こんな男は堰口に張り番をさせて、水を留めさせるには持つて來いだ。

ハリフヲードとセパートンがテームス河と接する處は一寸立派だ。併し爾

うかと云つて何も取り立てゝ言ふ程の事はない。唯だ一つ珍らしいのはセバートン寺院の境内に、詩を彫り込んだ石碑があることだ。僕は又ハリスが此處で船を下りて其れを見に行かうと言ひ出しはしないかと思つてびくびくして居た。奴も船着場の方を見て何だか行つて見たさうな顏付をして居たから、僕は一寸奴の帽子を水の中へ突き落してやつた。すると急いで其れを取らうとする、其どさくさ紛れに奴墓の事は忘れて仕舞つた。

ウエーブリッヂで、ウエー河(此河はギルフヲードまでは小さな船だと乘り進められる、だから僕は何時からか一度遡つて見やうと思ひながら、未だに素志を果せないで居る。)と、ベージングストークと云ふ運河とが一緒になつてテームス河に落ち込んで居る。水門は丁度町の向側に當る。此水門が見えるやうになると、先づ第一に水門の戸の直ぐ上の處にジョージの運動衣が見えた。近づいて能く見ると、奴其内に入つて居た。

モントモレンシーはけたゝましく吠えた。僕は大聲に喚いた。ハリスは銅鑼聲を張り上げた。そしたらジョージは帽子を振つて叫び返した。水門の番人は誰か水に落ち込んだものと心得て、水中を捜す棒を腋下にかい込んだまゝ飛び出したところが、さうでも無かつたので、奴失望したやうな貌をした。

ジョージは何だか油紙に包んだ物を持つて居た。柄が長く差し出て、先は圓く平つたくなつて居た。

『何だい、揚げ鍋かい。』とハリスが聞くと、奴可笑しな面付をして、眼を光らせながら、

『さうぢやないよ。今此れが大流行なんだ、船遊びに出掛ける者は誰でも持つて行く。バンジョウ(樂器)だ。』と答へた。

『バンジョウだなんてつたつて、君に其れが奏れやしまいが。』と僕はハリスと異口同音に聞き返すと、『さうだ、奏つちや見ないが、併しさう六ケ敷いも

のぢやないさうだ。獨習書もちやんと用意してあるがね。』と答へた。

九

ジョージが來たから奴に仕事をやらした。處が奴喜んで仕事をしない。そして町でうんとやつて來たからと胡麻化した。すると癇癖持ちでお負けに同情嫌ひなハリスは、

『町でうんとやつたんだから今度は河でうんとやつたらいゝぢやないか、仕事に變化があるのは却つて藥だよ、出て一つ曳いて見ないか』と言つた。

ジョージは良心——然り我が友ジョージの良心——に對しても厭と云ふ譯には行かなかつた。けれども奴、茶を入れるのだつて矢張り勞働には違ひないから、成る可くば船は僕とハリスに任せて、自分は茶を入れる仕度でうしやうつてな事を一寸ほのめかした。併し如何せん、僕とハリスはもう大分疲

れて居る。だから結局僕等が船に留つて奴に曳綱を持たせることにした。奴は滔々其れを取つてボートを出た。

此曳綱と云ふ奴が又一種面倒なものである。僕等は新調のズボンでもたゝむ時のやうな注意を拂つて此奴を卷いて置く、そして五分間も經つて其れを取り上げて見ると、はや何時の間にか素かつて、手も付けられないやうになつて居る。

僕は好んで讒謗罵詈を逞うする者ぢやないが、諸君試みに普通の曳綱を收つて其れを一直線に畑の中に引き渡して、ものゝ三十秒も經つてから又其方へ向き直つて見給へ。奴屹度畑の眞ん中に圓くなつて、處々結び節を拵へた上、而も兩端が何處にあるか解らないやうになつてるから、それで今度は草の上に坐つてぶつくさ言ひ乍ら其れを元のやうに解きほぐすには、請合ひ三十分は何うしてもかゝる。

此れが普通の曳綱に對する僕の持論なんだ。勿論時には除外例もあらうさ。僕だつて全く其れが無いなどゝは決して言はぬ。さうだ中には充分自分の職掌を辱めない、良心の發達した立派な曳綱もあつて、曳綱とさへ云へば何れも此れも自分は木通細工だ位に心得て居て、人が手放しさへすれば恰かも編み物の敷布か何ぞのやうに縦横無碍に縺れ廻るものだと考へてる奴ばかりぢやあるまいさ。僕は世の中には斯んな良心の發達した曳綱もあつて欲しいと思ふ。が如何せん、僕未だ此種の曳綱を見たことがない。

今僕がジョージに渡した曳綱は、水間に入る前にちやんと調べ上げて置いた奴なんだ。ハリスは亂暴だから其れには手も觸らせなかつた。僕はそうつと其奴を環に巻いて、中を括つて二つに曲げて、ボートの底に藏つて置いた。ハリスは其奴を科學的に取上げてジョージに渡した。ジョージは其れを受取つて、恰かも赤ん坊の汚れ物でも取換へてやるやうな態度で解きかけた。そ

してまた五六間も解かん内から、もう筵かなんぞのやうに縺らして仕舞つた。

何の曳綱だつて變りはない。何處でも同じやうな事が繰返される。岸に上つて解いてる奴は、巻いた奴が悪いとばかり思つてるから、

『何だ馬鹿々々しい、曳綱で網でも結く考なんか。やり方が悪いからこんなになるんぢやないか。巻くなら巻くで何故もつと縺れないやう氣をつけないか、馬鹿だなア貴様は。』と船の奴に喰つてかゝる。そして曳綱と組打しながら絶えず悪口を言ふ。此度は此奴を道の上に投げ出して其周圍をぐる〳〵廻りながら絲口を探す。

船の奴も默つちや居ない。

『何言つてるんだい、君に渡した時アちやんとして居たぢやないか。何故考へて仕事をやらないんだ。貴様があまりそゝつかしいからそんなになるんだ。貴様なんかに解かせた日にや首絞め棒だつて縺らかして仕舞はア。』と怒鳴り

返す。

両方から喧嘩腰で、今度は曳綱で絞め合ひでも仕兼ねまじき權幕だ。それから十分も經つと陸の奴が大きな聲を出して氣狂ひのやうに綱の上を躍り廻る。そして何處でも構はずぐい〳〵引く。綱はます〳〵縺れる、今度は船の奴が應援に出掛けて來る。應援はいふが其れが却つて邪魔になつて兩方から邪魔の仕合ひつこをする。同じ一縺れの部分を一時に兩方から引つ張つて何處で結ばつてるのかと驚いて居る。二人同時に錯誤を發見して河の方を振向くと、ボートは疾うに岸を離れて一直線に水門の方へ流れて居る。

僕も一度此んな場合に出會はしたことがある。確かボベニーの附近だつたと思ふが、其朝は少し風だつて居た。僕は其時河を渡ぎ下つて居たが、岸をぐるりと曲つて見ると、二人の男が堤防の上に立つて、如何にも困り切つたやうな、それは〳〵氣の毒な顔をして兩方から顔を突き合せて居る。僕は後

にも前にもまだあんな氣の毒な表情をした人間を見たことがない。二人共曳綱を持つて居た、何事か起つたと云ふことは一見して解つた。僕等は其傍に行つて譯を尋ねた。

『ボートが流れをつたんだ。繩を解いて河の方を見たらもう疾うに流れて居るんだ。』と口を尖らした。

そしてボートのやり方が如何にも卑劣だと云つたやうな面付をした。

ボートは其處から半哩許りも下つた川下の葦の中に引つ掛つて居た。僕等は態々其れを曳いて行つてやつた。奴等も其後一週間の間は請合ボートを流しはしなかつたらうと思ふ。曳綱を手にしたまゝ、堤防を行つたり來たりして、頻りにボートを捜して居た奴等の顏付を僕は今だによく覺えて居る。

河には曳船に伴つて種々の失敗が演ぜられる、其中でも曳く奴が二人話に夢中になつて、〳〵どし〳〵岸を曳き上ると、二三町も後方に放つときぼりにさ

れたボートの中に一人の男が乗つて居て、無暗に大きな聲を出して曳いてる奴を呼び留めやうとして居るが、聲が達せぬものだから有り合ふ櫂を振り廻して氣狂ひのやうになつて居る圖などは殊に面白い。斯んな場合には舵が離れるか、水棹が水に落ち込むか、でなければ帽子が水に落ちてぷい〳〵押し流されて居るか、其他何か此に類した事件がおつ始まつたに極つてる。船の奴は曳いてる奴に、

『おい君帽子を流したから一寸待つて呉れないか、』と初めは極く穩かに出る。併し曳く方では氣なしにずん〳〵曳いて行く、すると、

『おうい、トム君——ディック君つたら、聞えないのかい、君等は。』と今度は少し聲高くなる。愈々聞えないとなると、

『おい、これ、何うしたんだい、馬鹿ッ、留めろつたら、馬鹿だなア貴樣は ッ。』と敦圍く。

其れから飛上つて地圍太を踏んで眞赤な顏をして怒鳴りつける、そして知つてるだけの惡口を並べ立てる。一時間四哩位の速力でづん〳〵引き上られて、飛出やうたつて飛び出ることも出來ず、惡口を言ひ〳〵一人で躍起になつて居ると、通りすがりのいたづら小僧共は態々歩を停めて、岸からべつかんこうをしたり、石を投げたりして其奴を焦らす。

此種の失態は船を曳いてる奴が、少なくとも自分等は船を預かつてるんだと云ふ覺悟で時々ボートを振り向いて、乘つてる奴を注意してやりさへすれば、充分救ふことが出來る。二人だと得て斯んな失敗が伴ふから船を曳く者は一人に限る。二人で曳いてると、何時か話に身が入つて、其結果ボートの事は忘れて仕舞ふ。するとボートの抵抗力だつて知れたものだから、お仕舞には曳いてる奴に忘れられて仕舞ふ。

船を曳く奴が得て船を忘れる實例として、ジョージは其晩、晩餐が果てゝ

から此種の問題が話題に上つた時一つ面白い話をした。

彼と外に三人の者だと言つたから、つまりジョージを加へて都合四人の者が、或る晩澤山荷を積んだ船で、メーヅンヘッドから漕ぎ上せて居つた時の事である。クックハムの水閘の少し上手の處を或る若者が一人の娘と一緒に何か餘程面白い話があると見えて、双方共話に夢中になつて曳船の道を上つて行く。二人で水棹を一本持つて居るが、其れには曳綱が結び付けられたまゝ、其端はだらりと水の上に垂れて居る。ちやボートでも引いて居たのかと見ると、四邊にはボートの影も見えぬ。併し曳綱の一端がボートに結びつけられて居たのは明白である。けれども其ボートは何うなつたのか、又何んな恐ろしい運命に出會つたのか、又果して誰が乘つたまゝ曳き捨てにされたのか、這般の消息は更に解らない。併し何んな事件が發生したにもせよ、現在船を曳いて居る先生達は、一向失望したやうな樣子も見えず、二人で水棹を

握つたまゝ、づる〳〵曳綱を引きずつて居る。そして此以外に仕事はないと云つたやうな面付だ。

ジョージは聲を掛けて夢中になつてる奴等を呼び覺してやらうかとも思つたが、其時一寸面白い考が浮んだから、聲をかけるのは見合はして、ジョージは直ぐ水棹を取出した。そして水の上を流れて居る曳綱の端を自分の船に引寄せると其端を環に結んで、其奴をそつと帆檣の尖端へはめた。それから船を漕ぐのを止めて、皆船尾に集まつて煙草を吸つた。

二人はいゝ面の皮さ。そんな事とは知らずにうんと荷積みをした上に、肥大漢を四人も載せたボートをマーロー迄曳いて行つた。

奴等が愈々水門に着いて、自分等は引く筈でもないボートを二時間も續けざまに曳いて居たと解つた時は、悲しいやうな魂消たやうな、それは〳〵何とも名狀し難い妙な顏をして見せたが、僕はまだあんな顏付を見たことがな

いとジョージは言つた。そして若し其際此青年の傍に今の婦人が居て、其爲め青年の感情を和らげる媒となならなかつたら、青年は其際或は過激な言葉を弄したかも知れなかつたと言つた。

女の方が先づ心を取り直して、何か思ひ出したやうに、

『伯母さん、何うなすつたでしやう、ねえ、ヘンリーさん』と言つたさうだ。

『そして其伯母さんは後で見付かつたのかい。』とハリスが尋ねたら、ジョージは知らないと澄まして居た。

曳く者と曳かれる者との間に意志の疏通を缺いた危險な場合を、僕は一度ジョージと一緒にウヲールトン附近で目擊したことがある。其處は曳船の道で次第下りに河の方に傾斜した處だつたが、僕は其時對岸に立つて河畔の光景を展望して居た。曾時經つと一隻の河船が曳船に使用する駄馬に曳かれて非常な速力で河を遡つて來た。馬には小僧が一人載つて居た。船の中には五

人の男が此方に一人、彼方に一人、さも眠つたげな風付でちらばらに陣取つて、就中舵を取つてる奴などは殊に悠然と構へて居た。

『野郎共一失敗やらかすと面白いがなア』と船が僕等の前を通る時ジョージは呟いた。すると果して舵取が失敗つた。船は萬反の布を裂くやうな音を立てゝざざあッと岸へ乘上げた。瞬く間に大の男が二人、大籠一個、櫂三丁見る〳〵左舷から飛び出して岸へ枕した。其れから一分間の猶豫も置かず、今度は又二人の男が右舷から投げ出されて、見ん事棹や、帆や、袋や、德利の間に尻餅を搗いた。其れから最後の一人は船から六十間も先の方へ逆樣に投げ出された。

ボートはお蔭で荷が輕くなつたやうなものだから俄に速力が加はつて來た。馬上の少年は聲を限り馬を勵まして一目散に駈けさせた。投げ出された奴等は起き直つたまゝ、互に顏を見合せてだんまりの業だ。が二分間も經つとや

つと正氣に復つて、『止めろ、〳〵』と少年に呼びかけた。少年は馬に夢中になつてるから其れが解るどころの場合ぢやない。ちつと見て居ると、奴等はとう〳〵起き上つて、少年の跡を追蒐けた。其れも見てる間に雲霞と駈け隔たつて暫時で見えなくなつた。

僕は奴等を別段氣の毒とも思はなかつた。氣の毒などころか、斯んな狡い眞似をやる奴、——實際斯んな狡い眞似をやる奴が澤山ある。——はどしどし斯んな目に會へばいゝと思つてる。奴等はこんな狡い眞似をやらせて其爲め現在自己を危險な地位に置くばかりでなく、側を通つて居る外の連中へだつて隨分ひどい迷惑を掛ける。速力が速力だから、亙に邪魔になるからと言つて、奴等の方から避ける譯にも行かないし、爾うかと云つて此速力で船を曳かれた日にやア、此方からだつて奴等を避けて居る暇などはありやしない。だから奴等の曳綱が此方の帆檣へ引つかゝつて、此方の船を覆へすか、船の

横腹を掬つて乘つてる者を河へ跳ね飛ばすか、さもなければ痛いッと言ふ程綱で顏を引ッかするか、何方かだ。だから已むなくんば此方ではしッかと船に踏み應へて、帆檣の先で奴等を突き返してやるより外に仕方がない。

曳船から得られる經驗の中でも殊に面白いのは、娘共に之をやらせた場合だ。此感じばかりは又特別で、何人も之を味はざる可からざる底のものだ。曳船には大抵の場合、三人の娘が要る。即ち二人は綱を曳くんで、も一人は其處いら中を駈け廻つてきやッ〳〵と騷ぐ奴だ。奴等は先づ曳船の綱を身體に卷き附けて大騷ぎを始める、それから綱を脛に卷き付ける、道に坐り込んで思ひ〳〵に其れを解く、今度は綱を首に絡ませてすんでの事に絞れ死しようとする。併し先づやつとの事で綱を取直して、それから乘つてるものゝ、五六町も曳いたかと思つてると、

ら〳〵する位な速力で曳いて行く。もう息を切らす、俄かに踏み止まつて草の上に坐る、そしてきやッきやッ

今度はもう

やッ騒ぎ出す。乗つてる者は呆氣に取られて、櫂を取り直す隙もあらばこそ、船は何時の間にか中流に流れ出して、もう方向を轉換して居る。奴等も同時に立ち上つて喫驚する。そして、

『おやまア、船はもうあんな方へ行つて仕舞つたも。』ツてな事を言つて懵乎してる。

今度は少し我慢して曳く、曳いてるかと思ふと、其中の一人が裾をピンで挟げやうとして曳き止める、船はざら〳〵砂を噛んで早速瀬に乗り上げる。乗つてる奴は飛上つて、船を押し出し乍ら、『止めちやいけん、』と怒鳴る。聲が達しないものだから、

『へえ、何うかしたの？。』と聞く。

『止めちやいかんよ。』と怒鳴り返す。

『いけないつて、何うかして？。』

『止めちアいけんよ、早く曳かないか、早く。』

『エミリーさん、一寸行つて見て頂戴、何言つてるのか薩張解らないから。』と一人が言ふ。エミリーが船の方へ來て、

『何うしたらいゝの、何かいけない事があつて？。』

『何うもしやアしない。曳きさへすりやいゝんだよ。止めてちや困るぢやないか。』

『何故？。』

『何故つて船が行かなくなるからさ、君達とボートの間には何時も幾らか間隔がある位でなくつちやア駄目だよ。』

『間隔ツて、何？。』

『幾分か間隔がなくつちやいかんと言つてるんだ、息まずに曳けと言つてるんだよ。』

『さう、解つてよ。ぢや皆さんにもさう言つて見るわ。だけど曳き方はあれでいゝでしやう?。』

『いゝとも、止めさへしなきやいゝんだよ。』

『曳船なんッてやつて見りやさう六ケ敷い事もないのねえ、私徐程六ケ敷いものかと思つてたわ。』

『なに、譯もないものさ。我慢してさへやりやアいゝんだから。』

『あのね、一寸、私の赤いショールを出して頂戴な、たしか蒲團の下になつてるわ。』

船の奴は仰せに從つて其れを捜して渡してやる。すると其間にも一人の娘が又船の處へ來て、自分のも出して欲しいと言ふ。船の奴はメリーのと間違へて出して遣ると、お生憎さまメリーは其れを入らないと言ふ。二人は又船の處へ戻つて來て、メリーの肩掛を返して、其代りに櫛をと言ふ。彼是する

のに二十分も手間取る。漸く曳き出して往くと、今度は曲り角に牛が繋いである。船の奴は態々船を出て其れを追ひこくつてやる。娘共が曳船をやつてる間は船中實に寧日なしだ。

ジョージは其れから曳綱を取つてペントン・フック迄曳いて往つた。其處で僕等は何うして夜營したものかと相談した。其夜は船に寢やうと云ふ事だけは取極めたが、併し其處で船を止めやうか、それともステーンズ迄漕ぎ上せやうかと思つて處置に迷つた。だが未だ太陽の顔が見えてるのに夜營の相談は少し早計だと云ふので、僕等は其れからまだ三哩半ばかり上手に當る、ランニーミードと云つて、靜かな森に圍まれた、一寸いゝ船宿りがある處まで漕上らうと云ふ事にした。

併し後になつてペントン・フックにして置けば宜かつたと後悔した。これが

朝の間の事なら、三哩やそこら漕ぎ上るのは譯もないが、日の永いのに一日漕ぎ草臥れた後だと、此奴は少々厄介である。この最後の三哩を漕いでる間は、目に見える景色だつて一向面白くなく、喋舌るのや笑ふのは尚更厭だ。半哩も漕ぐともう二哩も漕いだやうな氣がする。そして現在自分が漕いでる場所が果して自分が想像して居る場所に當るのか、其れからしてどうやら怪しくなる。果ては地圖まで疑ふやうになつて來る。自分は少なくともう十哩も漕いだ位に思つてるのに、目的の水門は何處にあるか影も見えぬ。果ては誰か水門を盜んで持逃げでもしたのかと怪しくなる。

僕は一度此奴でひどい目に逢つた事を覺えて居る。(尤も聊か誇張して言ふのではあるが。)其時は母方の從妹と二人、ゴーリングへ向つて漕いで居た。もう時刻も大分遲かつたんで、早く目的地へ漕ぎ入れ度いと焦つて居た。從妹は婦人だけに殊更焦り切つて居た。ベンソンの水門に着いたのは彼是六時半過ぎ、暗はそろ〳〵黑い襞襀をたゝみ始めた。從妹は益々やきもきし出した。彼は夕飯までには何うあつても家に歸らねばならんと言つて居た。僕も同樣だと言つて持つてる地圖を開いて道程を調べて見た。するとウオリングフヨードと云ふ次の水門迄は正しく一哩半、クリーブ迄だとまだ五哩だつた。

『なあに、これなら大丈夫、七時迄には十分次の水門は乘り切るから、』と僕は大呑込みに請合つて、と後は一つだ。』そこで漕ぎ出した。

橋をくゞつた處で水門が見えるかと從妹に尋ねたら、まだ見えないと言ふ、僕は『おや!』と言つて又漕ぎ出した。そして五分間も漕いでから又訊ねて見た。すると、

『まだ影だつて見えやしないわ。』と言ふ。餘り怪しいから、奴め氣を損はないやうに、

『お前、水門は解つてるんだね。』と訊いた。

『お前、水門は解つてるんだね。』と訊いた。

此れが果して逆鱗に觸れた。從妹はそんなに疑ぐるなら寧そ自分で見張つて居たらよからうと言ひ出した。然らばと僕は櫂を投げ出して盜取眼を見張つて、河は前面一哩の間夕暮の暗に一直線を畫いて居る、併し水門の影も見えぬ。

『道を迷つたんぢやなくつて？』と從妹は尋ねた。

僕はよもやそんな事はあるまい、併し或は瀬に入つて水の落口の方へ流されてるかも知れぬ。其れだけは確と請合へないと言つた。

此悲觀説は從妹を喜ばせるどころか奴とう〳〵泣出して仕舞つた。そして二人とも今夜此處で溺死するんだらう、此れも貴方と一緒に出た天罰だと言つて益々泣いた。

僕は其れは少し極端だと思つた。併し從妹が降れば宜いゝと思つてるらしかつた。

僕は奴を樂觀させねば困ると思つて、自分は早く漕いだつもりでも、實際まだ思つた程漕いで居ないんだらうから、もう少し漕いだら水門に着くだらうと慰めて、又一哩の積りで漕ぎかけた。

僕も何だか妙になつて來た、で又地圖を披いた。ウヨーリングフヨードは矢張りベンソンの一哩下に、而も鮮やかに載つて居る。地圖は信用が出來る立派な地圖である、のみならず僕は現によく其水門を記憶して居る。其處は以前二度程通つた事がある。して見ると今僕等は何處いら邊に居るんだらう？。何處を何う間違つたのか更に解らない。僕は其時此れは夢に違ひない、今は眼が覺めると誰かゝ側で、『君もう十時だよ。』と言つて呉れるだらうとも思つて見たりした。

僕は從妹に夢とは思はないかと訊いたら、私も今丁度同じやうな事を貴方に訊いて見やうと思つて居た所だつたと言つた。で今度は其れなら二人とも

夢見てるのかと訝かつた。果して二人とも夢見てるのなら、一體何方が夢を見て、何方が其伴侶になつてるんだらう。斯う考へると益々妙になつて來る。

併し僕は漕ぎ續けた。水門は依然として現はれぬ。河は重なる夜の影に包まれて益々陰氣になつて、萬象は愈々恐ろしき形相を呈し來つた。僕は其時魑魅魍魎、惡鬼羅刹の眷屬を始め、一夜中岩の上に彳んで、急湍に人を誘ふ船幽靈の類まで、恐ろしい者ばかり連想した揚句、今までにも少し善根を薦いて、お題目の一つも唱へて置けばよかつたと身に抓まされて、つく〴〵其んな事を考へ續けて居た。と其時「其人なりき、あはれ〳〵」と歌ふ唄の聲が合奏する風琴の音と入り亂れて聞え出した、僕は『あゝ助かつた。』と思はず吐息を漏らした。

僕は總體風琴は嫌ひなんだ。だが其時ばかりは實に其音曲が有り難かつた。オルフユウスの聲、アポロの笛は愚か、其他一切の鳴物の中で、まだ其時の樂譜程僕等に取つて有り難いものがあらうとは思はれなかつた。否、其時の心の狀態から推して考へると、天來の妙曲とでも云つたやうなものは、却つて恐怖を誘ふ媒となるに過ぎなかつたらうと思はれる。だから其時の樂曲が若し能く符節に合つた、言はゞ心神を醉はしめるやうな曲だつたら、僕等は却つて其れを神仙の爲す業だ位に心得て、失心したかも知れなかつた。併し「其人なりき、あはれ〳〵」と云ふ曲が、以て、千切れ〳〵に痙攣的に奏でられたんで、喘息にでも罹つたやうな風琴で、人を安心させるやうな處があつた。

曲が次第に近づいたと思つてる内に、はや澤山の人が乘込んだ一隻のボートが僕等の側近く艤はれて居た。

船には月明を求めて乘り出した若い衆連の一隊が乘込んで居た。(尤も其晩は遂に月は出なかつたが、併し此れは何も先生達の罪ではない。)僕は生涯を

通じて此時の人達程懐かしく思はれた人は未だ一人もない。僕は連中に挨拶して、ウヲーリングフオード迄の道を尋ねる序に、今まで二時間餘りも其水門を捜して居たんだと言つたら、

『へえ、ツヲーリングフオードですつて、あれが撤れてからは貴君もう一年餘りにもなりますよ。今そんな處なんかありやしません。此處はもうクリーブでさア、ツヲーリングフオードなんつて今頃そんな處尋ねる人があつたら首でも上げますよ。』と云ふ話だ。

流石の僕も其れだけはついうつかりして居たんだつた。僕はさう聞かされると何だか有り難くつて、奴等の首つ玉に噛りついて、接吻でもしてやり度かつた。併し何分流れが早くつて手間取つて居る譯に行かなかつたから、唯だ通り一遍の謝辭を述べて、其れで満足して居らねばならなかつた。

僕等は再三此連中へ謝意を表した上、宜い晩ですなんつてな事を言つて、

『御無事に、』『御機嫌宜う』を並べ立て、今では何だかうろ覚えではあるがどうか家へ遊びに來て、一週間でも苦しくないから逗留して呉れとまで言つたやうに記憶して居る。從妹は又此人達を連れて歸つたら、お母さんが嘸喜ぶだらうてな事を言つた。其れから僕等は『フワウスト』中の兵士の合唱の句を聲高に歌つて、晩飯の間に合ふまでに家に歸つた。

十

僕とハリスはベルウエアの水門も、屹度此一例のやうな譯で取去られて居るに違ひないと考へ出した。ジヨージはステーンまで僕等を曳いて、其の先は僕等が交代して曳いて見たら、何だか斯う五十噸位の物を曳いて、四十哩も歩いてるやうな氣がした。ベルウエヤの水門に入つたのは七時半だつた。水門を入ると、何處へ船を引き入れたものかと、八方に眼を配つて、河の左